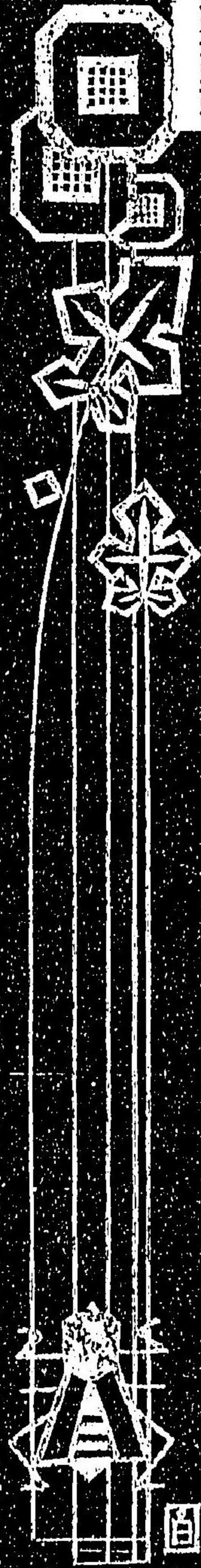
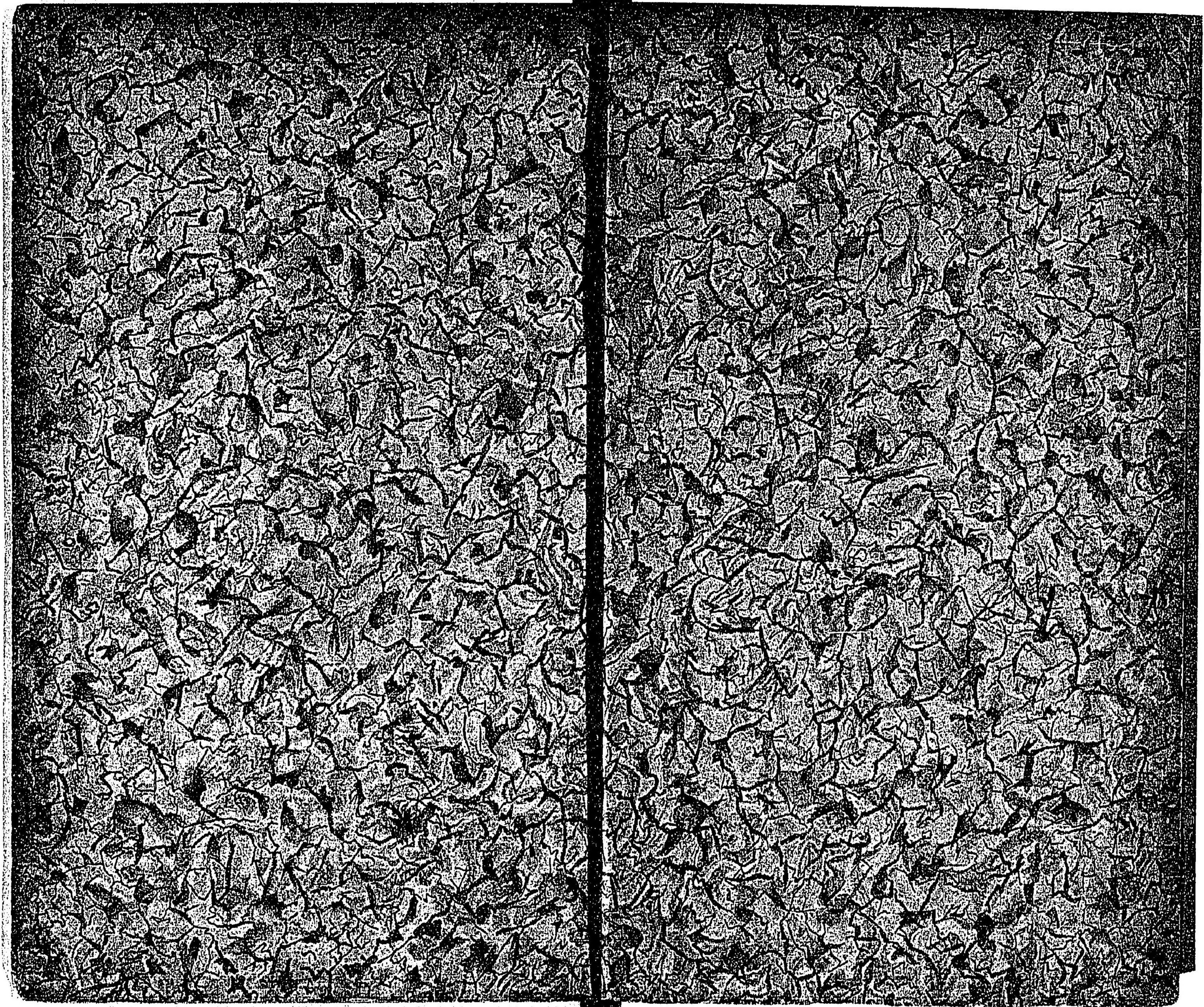


人生之昆蟲



64  
226







64-226



と  
昆虫  
学

明治  
42 8 12  
内交



人 虫  
共 棲

明治四十二年六月既望

理學博士佐木忠次郎題



理學と文學との調和を企て、併せて通俗の説明を試みたるもの、植物の方面に於ては、川上氏の「花」あり、田中氏の「花物語」等ありと雖も、動物の方面に於ては、閨として其聲を聞かず、知友前澤君の著、蓋し空谷の登音か。惟ふに昆蟲の饒き、優に動物界の他綱に冠絶し、其常習生態各相同しからず、隨て其人に對する關係の複雑なる、亦他に其儔を見ず。君の此著や、多少不厭深的の嫌なきに非ずと雖も、其才筆と、其學識と相煥發して、自ら一道の光芒陸離たるを覺ふ。其今日の學界に裨補するや疑を容



れざる所なり。乃ち所感を卷首に辨す。

明治四十二年三月

矢澤米三郎

## 序

畏友淵月君は教育家である。同時に昆蟲學者である。更に文學者である。碧山清流の伊那の里に、君は幾百の兒童を引率して、野に花を摘み、山に鳥の歌もきかると、であらう。昆蟲學者としての君は、今度人生と昆蟲と題する一書を公にする事となつた。君が生みの愛兒である。苦心の賜物である。君は非才の僕に向つて、序文を書けと云ふ。乞ふて一閱するのに、人生と密接なる昆蟲に就いて、科學的記述以外、別に文學的方面にも大いに自己の



主張を發揮して居らるゝ、即ち天下に昆蟲學者は  
多いけれども君の如き文學思想ある學者は一人  
もなからう、夫れと同じく、天下に昆蟲の書籍は少  
くないが、この人生と昆蟲の如く、豊富なる趣味と  
適切なる利益を與ふるものは、殆ど一冊もなから  
うと思ふ、此の點に就いては、大いに天下の讀書界  
に誇るに足るので、僕が序文の徒らに蛇足を添へ  
たのを遺憾に思ふのである

東京博文館にて

木村小舟

七月十日

はしがき

生みの親は 吾とし云へど

救ひの主名つけの親は

岐阜に在す名和昆蟲翁

榮えあるべく此首途見送り給ふは

名をつらね給はりし諸名家にして

割厥の業の何かにつけて

力添へられしは市川七作君

斯くて我が兒は、今世に出づるを得

此處に厚く感謝の意を表す

明治四十二年七月十五日

於信陽飯田著 者 識







# 人生と昆虫目次

## 第壹章 蚤

|           |       |            |       |                 |
|-----------|-------|------------|-------|-----------------|
| すつぽり被つた素絹 | ..... | 舊約全書の創世記   | ..... | 元來人間の向上         |
| には        | ..... | 善神と悪魔の混血兒也 | ..... | 山の芋化して鰻となつたやうな話 |
| 寺島杏林氏     | ..... | 其の名に就いて    | ..... | 名和先生の計算         |
| 其の體力      | ..... | 蚤の見世物      | ..... | 珍無類の出來事         |
| 檢鏡の目的     | ..... | 逃してなるものか   | ..... | 智慧は單に人間の専有ではない  |
| 汎心神       | ..... | 下等動物に於て然り  | ..... | 何になれとの古茄子       |
| 英國の紳士     | ..... | 北極地方の白狐に寄生 | ..... | 分類學上の位置         |
| 頭部の兩側     | ..... | 胸部には三對の肢   | ..... | 蚤の夫婦            |
| 雌雄淘汰      | ..... | 物騒になつて來た   | ..... | テル氏             |
| 蚤の卵       | ..... | 一度に産下せられる卵 | ..... | 成功の秘訣           |



數……………根氣くらべ……………四月八日……………萬寶全書……………五雜俎……………  
 ……我利一點張り……………害蟲驅除藥……………大國民中に此んなバチ  
 ルス……………ノミトリコ……………播種期……………苗床……………種下し……………  
 移植……………施肥……………手入れ……………根分け……………摘花の時期……………  
 乾燥……………如何なる方法……………其の收穫は……………自家用……………觀賞  
 用……………吾人と密接の關係……………三文の價值……………古代歌人の眼珠  
 ……グリームの童話……………多大の効果……………血を吸ふのも仕事……………  
 ……厚皮の靴……………之よりも尙ほ恐ろしい……………其の流行地……………  
 ……印度全部……………英國のベスト研究委員……………二論旨……………緒方  
 氏が先鞭……………ドクトルカロ、チラボシー氏……………北里宮島兩博士  
 ……鼠に寄生……………猫について……………コッホ博士……………回々教の  
 開祖……………飼猫販賣所……………三味線の皮……………禍も三年……………猫の  
 根源地……………小梅の邸……………聞き捨て……………之を全滅……………怪しか

る奴だな

第貳 蠅

日華軒に蕪じては……………實にく悪くい奴である……………五月蠅……………  
 ……貧乏籤……………段柯古曰く……………烏雲……………歐陽脩の憎蒼蠅賦……………  
 ……關の秋風……………坤雅……………實にうるさい……………眞理は凡て中  
 庸に存す……………蠅も面倒の一つ……………臭いものには蠅が寄りつく……………  
 ……貴賤等を異にす……………天の攝理……………利用厚生の途……………彼  
 も因果な蟲……………月清らかの夜……………童話……………露國の文豪クルイ  
 ロフ……………始末にいかぬ……………伊蘇普物語……………大慈は無慈に似た  
 り……………人間は惡魔の惡魔……………頭部……………眼……………胸部……………發  
 生の時期……………卵……………呼吸器……………一回の産卵數……………馬の多い  
 滿洲に蠅……………是は面白い……………大抵の祝盃……………よし／＼方法が



あるわい……………命合違反の罰……………昆蟲學上の位置……………其の仲間  
 ……蠅は灰から出る……………謝肇制……………自衛の上……………立派な看  
 板……………實に巧妙な比喻……………大日本帝國……………まゝならぬ此世……  
 ……血涙を流いで祝盃……………眠れる者よ……………淨瑠璃窟物語……………  
 ナチエール博士……………渠等は偉い……………俳句……………古人の糟粕……………  
 ……恰も綿を噛む……………

### 第 参 蚊

一五一頁

蚊はかむ也……………我が内地産……………西米の役……………飛翔力に就いて  
 ……は……………傳播の機會……………夕顔棚の下涼み……………頃は天明七年……………  
 ……今より七十餘年の昔……………デーキートクロニクル……………對岸の火  
 事……………何れも同じ夏の夕暮……………臺灣では……………支那の二十四孝  
 ……水滸傳……………征露の役……………嬉遊笑覽……………蚊屬討滅の宣言

書……………先鞭は歐米人……………勝利の豫測……………彼の習性……………蚊の  
 睫に巣くふ蟲……………此處に睫……………蚊の雄……………米國の電氣學者……  
 ……マイエル氏……………聽毛の模型……………マツカトテイー氏……………  
 佛蘭西の或る劇場……………動物感應……………さて其の雌……………露國のマ  
 クロウスキー氏……………和漢三才圖繪……………生まれる場所……………三要  
 素……………左右無臂の體形……………繪圖外國笑話奇談……………飛んだ犀雞  
 ……憎惡の感情……………彼の護謨毬……………北七里……………足元の御用  
 心……………世の衆生濟度……………馬太傳の一節……………慶雲の怪……………天  
 野翁の鹽尻……………彼の出沒は千變萬化……………端居は此方の不見識……  
 ……安岐津……………懸賞で募集……………雄略天皇の四年秋……………蜻蛉  
 の中……………人爲的驅除法……………ホソウド氏……………遂に無蚊島……………  
 緊密なる關係……………臺灣征討……………形態上の差違……………醫學上の方  
 面……………三日熱研究の結果……………關係の複雑……………此厄介者





目次終

人生と昆蟲 目次



# 人生と昆蟲

名和 靖 閣  
前澤 淵 月 著

## 第 壹 卷

FLEA

すつぽりと被つた素絹 を脱ぎ捨て、いつしか装ふ緑の衣に、四方の山々は一すはちらひのほの霞みして、花は我が世ときそひ出す。愉色みなざる野邊には綺羅紅を映じ、けぶれる空高く消え入るばかりに告天子は歌ふ。人の見かへりもせぬ塵塚にさへ陽炎は立つ。かるく襟元から揺れ込むなよ風は人の心を酔はしめる。蝴蝶は遠く夢を誘ふ。なるほど春である。能く世間でいふ菜種の花盛り、麥の一穂出、まあ此頃の眠り



心地は、夜具の一重を何にたとへやう。

紫のゆめ雲に入るあけぼのを

破れとやつく山寺のかね

之は未だしも、もう此頃から、夜のバラダイスと一日の疲れを休める床に無断で忍び込み、やがて神の御手にいざなはれ、無何有の郷にあこがれやうとする頃をしつくりと呼び返される腹立たしさ。其角がしやれて戯れた

蠅は名乗りけり蚤は盗人の由縁

どころではない。か弱い女性には

切られたる夢は誠か蚤の跡

こんな奴に跋扈されて

よい日やら蚤が跳るぞ躍るぞよ

(一) 茶

と佛顔ではすまされぬ。捕へたものを南無阿彌陀佛と逃してやる雅量は

無い。

しかしながら、彼の出所を追求してみるとなか／＼立派なものだ。すなはち

舊約全書の創世記に

『神言ひ給ひけるは 地は主物を其の類に従つて出し 家畜と昆蟲

と 地は獸を其の類に従つて出すべしと 即ち斯くなりぬ』

と明々白々に書いてある。それ以來、ノアはエホバの目の前に恩みを得てから

『生めよ。増殖よ。地に満てよ。』

の神託を恐れみ畏み、崇め奉つて子孫今日の繁榮をいたしたのでがなあらう。此處に於てか勝手の算用がちと狂ふ。誠に蚤にとつては慶賀の至りであるだけそれだけ此方は御愁傷様になる……とは云へ、昔孫敬と云ふ男は書を讀む時にあたり、繩を梁から頸に繋ぎ、居眠りすれば自ら



頸の絞められる装置にし、以て努勉し、蘇秦は宿直の金時それ宜しく錐を以て股を刺し、辯口の才を養ひ、白石は水をかぶつて惰眠を破りつゝ、其の學識を博めた事に想ひ到れば、今是等を一小蟲の痒さに比ぶるも固より霄壤の差はあらうけれど、又以て惰生警戒の所作とみるが良いかも知らん。

元來人間の向上には 第一刺撃が必要である。刺撃を受ける事の少ない人間は。どうも蒸し芋のやうに緊りが無い。多く受けた者は、小粒でも山椒の實のやうに、齒ごたへがあつてヒリ、ツと来る。彼の刺撃は、直接吾人に大教訓を與へて居るのだとも考へられる。すると蚤の居らぬ國は却つて不幸なのかも知らん。天が將に大任を下さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の體膚を餓えしめる。だから

『艱難人を珠玉にす』

と云ふ格言が現はれたのである。

『天豈に無用のものを生せんや』

と西なる國の哲學者は感歎した。蚤にも喰はせぬ此身體と育てあげるのは、却つて自然の攝理に背き、神の厚意を無にすると同一の罪を犯して居るのかも知れない。今は昔

善神と惡魔の混血兒也 と自稱する青柳有美氏亦刺撃の必要を鳴らし、て曰く。拘摸公許論。大岡流の赤頭巾では古くさい。要は彼等の自由に任じておく、餘人は拘摸れてはたまらんから周圍に用心する。用心するだけ注意深くなる。注意深くなるだけ伶俐になる。だから拘摸は必要である。政府は宜しく公許すべきである。と云ふのである。言は奇、論は突飛、氣の弱い者には飛んだ罪作り、識者にとつては擧蹙の種であらう。さりながら、其の眞意は酌み取つて、酔はぬまでも飲んでやらねばなるまい。實際左様だ。刺撃が無ければ口あんぐりの涎くり、山中暦日無く



一葉落ちて天下の秋を知る、老爺さ何ぢやではやりきれまい。さらば

蚤と共にまめ息才ぞ草の庵

(一茶)

ぐらゐに祝福すべきが至當であらうか。併し予は、譬へ神の厚意が無くなるにしても、極力大きな蚤取眼を以て彼を見てやらう。と定めて見て居ると、舊約全書のうちに

山の芋化して鱧となつたやうな話 がある

『汝の杖を伸べ、地の塵を打て、エジプト全國に蚤とならしめよ、

彼等斯くなせり。即ちアロン杖をとりて手を伸べ、地の塵を撃ち

けるに、蚤となりて人畜につけり。エジプト全國に於て地の塵皆

蚤となりぬ。法術士等其の秘術をもて斯く行ひて、蚤を出ださん

としたりしが能はざりき。蚤は人と畜に着く』

不思議な事だ。もつとも彫刻の水仙がパンと開いたり、書きつけた虎が跳り出したり、墨繪の馬が草を食ひに出たり、鳴かぬ鳥の聲きけば、生

れの先きの父母が戀ひしくなつたりする世の中だから、音樂に途ひつり込まれて、梁上に躍り出す程の感應力を具へて居る塵埃の事にしてみればアロンの杖を待たなくとも、蚤と成るぐらゐは朝飯前の仕事であらう。そはともかくも此蟲は、四千餘年の古に於て、頁の幾分を汚すの資格があつた事がわかる。我が國に於ては

寺島杏林氏 によつて古説は代表せられてある。曰く

『蚤は赤色にして肥身小首、六足能く跳ぶ。夏月人家に濕熱の氣によりて生じ、自ら牝牡あり』

濕熱の氣によりて生じ、自ら牝牡ありがありがたいではないか。支那にも随分古い史書にも載せられてあり、説文にはまはり遠い字の講釋がしてある。

其の名に就いて 古事記、日本紀などの古いものには見えないけれど、和名鈔や新撰字鏡には、万美 と訓ましてある。彼の貝原益軒は血を飲



む蟲だから、ノミと云ふのだと云ひ、大石千引氏は、ノミは速蟲 即ちトミから變じたのでござると云ふ。又或る人は、飛蟲の轉語だとも語り、いや退蟲からだらうと力む人もある。六書正譌には大石氏の説と同じやうな事が書いてある。大方六書正譌の方が本だらう。何れにしても大なる痛痒は感じまい。さあれ、支那人も云つた

『人を噛み飛ぶ蟲である』

は其の通り、實際能く飛ぶ蟲に相違ない。聞くならく其の昔小天狗とあだ名を取つた塚原ト傳が、恩師伊勢守の仇と目して、鞍馬に籠る麒麟法王の道場へ乗り込んだ時、一突き二頬三反齒流と云ふ古今未曾有の流名を宣言した事がある。對手になつたのは法王の門弟大黒堂、得たり賢しと勢猛に打ち込んで来るやつを、此方は名たゝるト傳だ。誘ひにかけておいてヒラリ身をかわした。こりやしまつたと一足退いたがト傳が見えぬ。怪しみながら振り返る大黒堂の喉佛へ一寸一突き、グツと蛙のやう

な音を出してのけ反るところを、肉の張り裂けるほど豊富な頬べた目がけてビシャーリ、不意の打撃に御當人の命令を待たず、急に筋肉が収縮したので、口は自然に門戸を開放して、反齒は大威張りではゝかりさまとも云はず顔を出した。其處を下から、軒に下つた氷柱でも薙ぎ拂ふやうに、ピンとはね上げたから堪らない。美事に家根を突き抜いて、落ち行く先きはハンガリー。是こそ本當のハナシである。蚤のは彼の講釋師の見て來たやうな出鱈目では無い

名和先生の計算 によれば、一飛びの距離は體長の大約二百倍、假りに之を人間五尺のものとしてみると

$$5尺 \times 200 = 1000尺$$

三國一の富士登山も、十二跳ねれば事が足りる。之を汽車の速さに比較してみれば、一秒間に

$$汽車 \times 29.8尺 : 蚤 \times 1000尺$$







にふさはしい野山建築物などを書き、其の前面に於いて、三十匹の蚤共に各自木製の小楡を持たせ、隊列運動をやらせたのである。

又別に二匹の蚤に馬具を附け、四輪黄金製の馬車を輓かせた。しかも此馬車には、一匹の蚤が揚々として安子御たりを氣取つて居たのだ。それから、他の二匹には砲車を輓かせ、或は雌蚤を馬にして、雄蚤を之に跨がらせ、騎兵の見えで乗り出させるなど、苦蟲噛みつぶしたやうな悶魔大王でも、眞面目な顔では見て居れまい。

しかし元來小さな蟲、此異様の出で立ちを如何して見るのかと云ふと、祭り場によくある、ハヅキ、と同じく、幕に仕掛けてある廓大鏡によるのである。殊に

珍無類の出来事 は、嘗て紐育の公園に於て、例の通り蚤に箱を曳かせる演藝を以て、公衆の好奇心を收攬して居たところが、同市の動物保護會員は

『蚤に馬具様のものを着けたり、箱を曳かせたりするのは甚だ殘酷の所置である』

と非常な不服を唱へ、種々運動の結果、遂に此興行は停止を命せられたと云ふ。随分奇抜にやりをるわい。又

其の智慧 を試みる爲めに、こんな事をした人もある。即ち特に一室の四周を白布で葢ひ、逃げ路や隠れ場所の無いやうにして、然る後中に一つの寢臺を拵えた。勿論此寢臺も眞白にしてある。唯是だけでは無い。其の寢臺の四脚は、直接蚤が這ひ上ることの出来ないやうに、水を盛つた器の上に立たせ、實驗者は其の寢臺の上に横たはつて居た。すると、其處に放たれた一匹の蚤は、其の近傍を徘徊して居たが、上る事の不可能なるを悟るとおほしく、其の壁を攀ち上つて天上を匍匐し、丁度寢臺の上と思ふところに到るや、ポツンと落ちて實驗者に取り附いたと云ふ。予は



検査の目的で、蚤の雌一雄二を試験管中に入れておいた。彼等は頻りに逃げやうと飛躍し、或は攀ち上り。遂に不可能と断念したものの、管底に入れておいた米粒ほどの綿屑に身を寄せて、暫く静肅の態度をとつて居た。此時一匹のヒラタアブが、障子に突き當つてブツ／＼やつて居る。

ふと思ひついて手早く捕へて其の試験管に投じた。蚤は翅音に驚いたのか。異様の怪物に膽を冷したのか。右往左往と活動しはじめた。ヒラタアブは、自由の天地に羈足を延ばしたいと幾度も上下した。と見ると、蚤は一匹しか居らぬ。之はと思つて凝視すれば、ヒラタアブの第三肢に一匹づゝしがみ附いて居る。予は愉快でたまらない。直にヒラタアブの逸出に便利を與へる爲に、管を少しく傾けて靜に保つて居た。ヒラタアブは出た、出て管の端で休みながら脚をうごかすうちに、蚤は何とも云はずビョン／＼

逃してなるものか 辛うじて捕へた二匹を先きの試験管に入れ、次ぎの装置にかゝつたのである。

即ち、直徑一尺二寸程の金盥に水を盛り、中央にコップを伏せた。そして此コップの底なる空地と、金盥の外との連絡をとる爲に一本の木綿糸を渡し、然る後前の二匹を綿屑と共にコップの底に落した、之と同時に一匹の雌を加へた、すると雄は一躍美事に金盥を飛び越してしまつたけれど、一雌は不幸にして水に陥り、一は探りあてた糸橋を渡つて出たのである。予は溺れやうとする彼れに救助を與へ、元の空地に歸らしめたのに、少時は容易に飛ばぬ。身體の水氣でも拂ふものゝ如く小運動をした後、遂に糸橋を見附けて渡つてしまつた。

以上の事實は何を意味するであらう。佛國ではルイ十四世の時、彼等は皇后陛下の御前に御召しを被り、演藝の御上覧を忝ふした事がある。是蚤共の光榮末代まで言ひ次ぎ語り次ぐべき事であると共に、彼等の侮る



べからざる事を證明して居る。

智慧は單に人間の專有では無い 動物と云ふ動物には記憶力を有して居らぬものは無いと云はれて居る。

佛國の動物學者ホール、ヅ、シャルル氏は、諸動物は如何なる生活をして居るか。其れを研究する爲に、亞非利加の動物の巢窟なる大森林に侵入し、種々なる危険に遭遇するも屈せず。萬難を排し、あらゆる辛酸を嘗めて、遂に、大森林世界てふ一書を公にした。此書は非常なる好評を博し、千九百〇二年英京倫敦に於て刊行せらるゝや、科學者ならぬ一般の人士に迄噴々其の名は傳へられた。是に就いて見るも思ひ半に過ぎるものがあらう。又、コーニッシ氏の、今日の動物なども、諸動物が意識的生活をして居ることを證明して居る。

殊に愉快に感ずる事は、無能と嘲けられて居た下等動物が、亦一種の心的作用を有することを正しく認められた事である。

さりながら、之を彼の、萬有は其の有機たると無機たるとを問はず、苟くも宇宙に存在する自然物は、共に等しく皆心意を有すとの説、即ち、古代の精靈説、及び物活説が、近世進歩したる自然科学の援助を得てから、復活の曙光を投げた

汎心論 の立脚地より論ずれば、フエヒチルならずとも當然許容すべき事ながら、さて實際に當つてみると、なか／＼分明で無い爲に、合點のゆかぬものが随分とある。之を實驗の上で

『下等動物にも猶一種の心的作用あり』

といふ事を確めたのは、エフ、ダブルユー、ヘッドレー氏で、氏は此事を、生活と進化と云ふ近刊の書物で説明して居る。而して、之が實驗に供せられたものは、原始生活を營む極微の單細胞動物で、アミーバや繊毛で泳ぎまはるところの極微の水蟲アンヒレプタス、メレーグリ。長毛管を以て其の身を支えるエビステリス。ブリカテリ。稍進化したもので



はズームニウムなどで、彼等は記憶力もあり。経験によつて適宜の生活をする撰擇力を有するばかりで無く、眞の智識をも有する事が立證された。

下等動物に於て然り 況んや蚤に於ておやである。實に注意に注意を加へ、研究に研究を重ねれば、益々興味に興味が輪をかける。

嘗て白魚の頭を三年研究した大學生があると聞く。夏目漱石氏の、我輩は猫であるの中には、硝子球磨きをやつた寒月といふ男があつた。首縫りの力學研究も面白からう。もし低かりせば、世界の表面に變化を及ぼしたであらうといふクレオパトラの鼻の研究も宜しからう。ドンダリの哲學亦可、田鼠を化して鶴となさしめる法、犬山道節流の火遁の術等、數へきたれば、研究の對象範圍は、實に廣々漠々である。似非哲學の假面をつけて、徒に煩悶々々と化けて出相な熱を吐かうより、人糞尿から黄金でも製出する法を研究してみるがよい。とは云ふものゝ、此處まで

來れば、少々道樂を超絶して居る。なに構ふものか。やつてみるがよい。之を好むもの之を樂しむものにしかすと孔子が扣へて居る。世人の口には戸がたてられぬ。俗輩の褒貶は眼中におくに足らぬ。燕雀何ぞ鶴鴻の志を知らんやと高嘯するは各自の器量次第である。ハドソン博士曰く。

『緑の水草の或る莖によりて横切られたる水の一滴中に横たはる此不思議なる有機體を見、或は其の行動に於ける其の方法よりして或る觀念を推察し、或は針の尖程の小なる點を自由に游泳する微蟲を視、或は種々なる色を以て閃く其の頭を見、或は水草の莖を滑べり、其の食物を探し求め、其の餌を奪ひ、或は敵より逃れ、其の友を追ふ様を見、蟲自身の音樂につれて狂氣じみたる舞踏をなすを見、又其の生活の如何にも幸福なるを見れば、誰か此光景より離れて、單に書籍或は繪畫にのみ満足するものあらんや。必ずや彼が後に残せし凡ての不思議なる世界は、常に彼が眼前に彷彿



と、嗚呼、心眼を開いて自然に接するか。私心を投げて其の懐に飛び込めば、盡きざる恵みを垂れて、吾人を羨ましい郷に導かうとして居るではないか。キングスレー氏は曰ふ。

『此處に余は久しく自然の秘密を楽しめり。而して此場合に於て、余は如何にしても決して余一人なりと云ふを得ず。如何となれば余と等しき人間こそ余が傍に居らざれども、余は、蜜蜂花小石等の最も樂しき仲間を伴ひ居ればなり。余が、沼池草叢を過ぐる度に、何物かを得ずんば通過せざるのみならず。全體とは云ふこと能はざれども、彼等の秘せる一部の面白き物語は、之を我が心に讀むを得たればなり。實に今日迄に、此世に發刊せられし書籍中、聖書を除きては、自然ほど興味ある書籍は一もあらざるなり』  
愛する者は亦愛せらる。自然を愛する者には嫉妬なく、怨恨なく、怠惰

憂鬱なる事なく、誘惑に遭遇するも危険に近づく事なく、常に心の靜穩と平和とを享受して、若やぎたる色を顔に漲らせて居る。實に幸福なるは自然の友。自然を愛する人。

蚤焼いて日和占ふ山家かな

(一茶)

何になれとの古茄子 なら是でもよい。しかし研究と銘うつからには尙ほ勘考がありさうなものである。

我が國に於ては、特別に蚤ばかり研究された事は未だ餘り耳にした事はないが、泰西に在ては、知名の學者が熱心にやつて居る。舉げて見れば、パットラー氏、リュウンヘック氏、ウエストウツド氏、ユーセル氏、ワグネル氏などで、殊に

英國の紳士 エム、シー、ロスタヤイルド氏の如きは非常なる熱心者で、寒帯から熱帯へかけて、長い日子を費し、集め得た標本は大約數萬有餘種、其れを悉く、先年開かれた聖路易の博覽會に出品された事は名



高い話である。

其の當時、此事を傳聞した一西比利亞人は、態々同博覽會に赴き、其處に陳列された蚤の種類を點檢し、自國に歸つてから、出品中に見あたらなかつた。

北極地方の白狐に寄生する蚤雌雄二匹を携えて、ロスチャイルド氏を訪問し、二千五百弗で賣り渡しの交渉をしたとか。彼の泰西人によつて、學術に關する新事實發見の先鞭をつけられるのも、あながち無理ではあるまい。

抑も蚤の知られたのは四千年の昔に在るけれど、之が研究の濫觴ともいつば、千七百四十六年、リンネアス氏が普通の蚤に名をつけた時であらう。其れより、カルステン氏の砂蚤、ランドイス氏の犬蚤の解剖、ベルテ氏の蚤に關する觸角の研究、タスシエンベルグ氏の蚤族の記録といふやうに、順次歩を進めて今日に至つたので、今明らかになつたのは七科

二十八屬、數年前に於て百八十三種の多きに達して居たのだから、かれこれ今日では二百種の缺けるやうな事はあるまい。而して此

分類學上の位置をと云ふと、研究者の見解によつて定まつて居らな

い。すなはち分類の目を簡易にする場合には、形態や習性の關係上之を蚊や虻と同じく

双翅目 DIPTERA

に入れ、尙ほ細かくする場合には

微翅目 APHANIPPTERA

に編入する。其の形態を云へば、口部は吸收及び刺螫に宜しく、上唇は無い。大腮は細長く、極めて銳利な齒を有つて居る。上唇は關節をあらはし、觸角は短く四節より成り、胸環は互に分離し、四翅は退化し、僅に其の場所に板状の小片が残つて居て、有翅時代の面影を偲ばせる。微翅目の名も此處から拜領したのである。變體は完全、多くは禽獸にしが



みついで、血液を食料としつゝ、半寄生々活を営み、其の分布區別は殆んど地球の全土に擴がつて居る。而して、之が寄生をうけるのは、唯に地上の禽獸ばかりでなく、海水に生活する海狸に取りついて居るものさへある。

ヒトノミ *Pulex irritans* L.

に就いて云へば、體は卵形で兩側は少しく扁平、外には赤褐色キチン質の強靱なる鎧を一着に及ぶ。之を上手に脱がせば、中には乳白色の素絹が一重ある。肉眼では見分け難いけれど、蟲眼鏡の下におけば、頭部が一節、胸部が三節、腹部が九節、都合十三關節なる事がわかる。頭と胸とは腹に比較して誠に小さい。頭部を除いて體の全面には、ヤマアラシのやうに剛毛が生へて居て、僅の空隙にも之でこち込む。指端に捕へた時逃げられ易いのは、少したりとも前進すれば、此毛の爲に逆戻りを防ぐので、力を極めて指を押し除けるうちに、何時しか脱出するからである。

る。

頭部の兩側 には、黒い漆でも點じたやうな美しい眼が一つ宛ある。之は複眼で單眼は無い。小さい事を蚤の眼といふが、體との比較から云へば敢て小さいとは云へぬ。口は刺蝮に適する嘴狀で、中央は血液を吸ふ管其の兩側が鋸齒のある及針、一番外廓が有節の鞘となつて居る。血液を吸収する時には、此及針を使用して皮膚を斬り、其の傷口から中央の一管を刺し入れるのであるが、及針の銳利な爲に、斬られながらも心づかぬ場合が多い。

胸部には三對の肢があつて、體に比較すれば不格恰に大きく、殊に優れて大きく長いのは第三肢である。彼が敵に出逢ひ危險に遭遇した時。備後表から琉球表まで高飛びし得るのも之が爲である。雌雄に就いて飛躍力を比較して見ると、先きの實驗でも證する如く小さい雄の方が強い。但諺に、夫が小さくて妻の目立つて大きいのを



蚤の夫婦 と云ふ。蚤の夫婦とは奇抜な比喻である。しかし昆蟲の方から云へば、雄小雌大は通例である。蚊も左様である。蠅も同じくである。されば、蚊の夫婦でも、蠅の夫婦でも、其の他何夫婦でも、苟くも此例にもれなければ宜しかりさうに思はれる。然らばと云つて蚊の夫婦説を唱へる程の事でもないが、よし唱へるにしても賛成はしてくれまいが、之によつて思ふのに、つまり蚤の雌雄は、蚊や蠅などより早く世人に認められて居た事が推知される。朝不意に蒲團を除けられた際、あわてふためきながらも、大事相に一匹背負ひ込んで逃げ出す氣色は頗る妙である。

驅け落ちを蚤取眼で睨みつけ

捕へて枕の上に爪で押しつぶせば卵が飛び出す。なるほど大きい方が雌だたと合點する。即ち雌雄の別が早く知られた譯、すなはち、人間に淺からぬ因縁ある蚤の夫婦説が、勢力ある譯も此處に存する。

今述べた如く、昆蟲にあつては多くは雄小雌大であるが、中には此反對に雌小雄大のものもある、彼の鞘翅目に屬する。

クハガタムシ *Merodorus reclus*

*Molsch* の如きは實に此適例で、其の武器の良く發達して居る様子により、一見直に雄なる事がわかる。之を

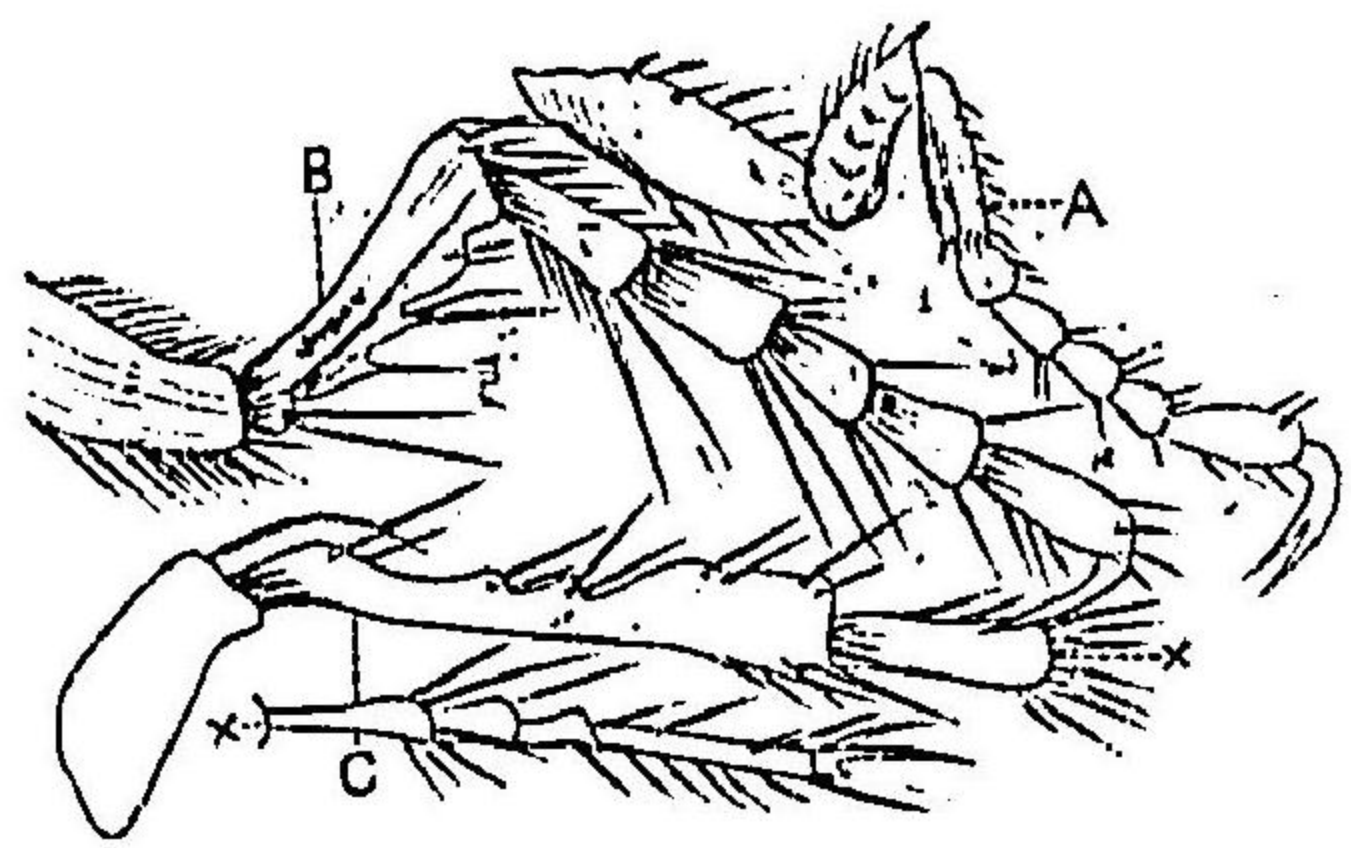
雌雄淘汰 と云ふ。蓋し動物界中、

雄が雌を超えて異常なる發達をして居る事は、先づ昆蟲類が隨一であらう。之は昆蟲類が他動物に比較して、

其の種類多く、生活状態の種々雜多

なるところより、自營上の必要から此結果を生じたものと思はれる。雄蟲の色彩の美麗なのが多いのも之が爲である。鶏の雄が體大に、蹴爪を

第二圖



蚤の肢  
A 前肢  
B 中肢  
C 後肢



具備して何となく勇ましいのも此理に因る。人間の男性が總じて筋骨逞ましく雄々しく、女性の優美に柔和なのも是と同一原因である……とすれば、世の中は女ならでは夜が明けかねるやうな事になりは……

物騒になつて来た 褒姒の罫は魔の淵か。相悪傾國傾城などの文字も残つて居る。しかし斯う悲觀したものででもない。蹴爪を伸ばしたり鉄形の兜を戴かなくとも事は解決されやう。有爲の青年が爲す事に事を缺いて、やれ戀のそれ鮓のと魚のやうに浮き身をやつさなくとも事である。學もし成らずんば死すとも歸らずと、衝天の意氣を以て笈を負ひ郷關を出た人間が、半年も経たぬうちに、キメチンキが欲しいの、クミチンキが苦いの、コスメチックが頭にしみ込んで、カスメチックで親の涙金を絞る。揚句の果てが、曰く解すべからずとか偉ら相な事をいふ。なまじひに眼をあけて貰つた其れだけ、莊子の云つた憂苦の種が増して成佛がし悪くからう。

リヒテル氏 曰く。

『青年は飛躍の時期なり』

と、誤解する勿れ。華嚴の瀧や淺間の噴火口に躍り込めと勸めはしない  
ダンベルト氏曰く。

『突進せよ。光明は汝に來らん』

注意せよ。蚤共は汝を襲はん。蚤の喰つたほどにも思はぬ無神経では、餘儀なく教養し難しと此方から手をひかずばなるまいが、尙ほ一言進呈しやう。心を静めて、左の偽を三唱して然るべし。

*Little things are little things, But to do little things faithfully is a great thing.*

小事は小事なり。然れども、小事をも忠實になせば大事となる。是から思ひついたのか。小使は小使なり。小使をも忠實になせば大使となる、と一轉語を下した男がある。小使と大使とは雲泥の相違、とは云へ明治の元勳には、微賤から身を起した風雲兒は尠くない。ゲーテも斯



う云つた。

『天才といふと雖九分までは精勵なり』

十デ神童十五で才子、二十歳過ぎればなみの人ともいふではないか。

成功の秘訣 は忠實なるにある。時代の要求するのも此忠實兒である。空をつかむやうな虚な事に醜醜せずとも、忠實に事を處理して居れば、時節到來木欣欣として榮ゆるにむかひ、いつか眼前に花咲く春は現出する。天才だからとて油断は大敵、小さいからとて如何して、眞に懼るべきは後世である。思へ。彼の常磐の懐にあげた呱呱の聲は、やがて三軍を叱咤するの聲となつたのではないか。

蚤の卵 も小さい。やがて三軍を叱咤するの聲こそあげね。仕出かす仕事は鵬越の奇襲より目ざましい働きをする英氣は充分に籠つて居る。後世の恐るべき事は敢て人後に落ちぬ。さあれ、世が世なれば流石に人目を憚り、塵裏などの塵埃中など、日光の直射せぬところに生みこまれ

る。形は楕圓表面は平滑、淡黄白色で粘着があつて、母體の比較から云へば小さくはない。其れが四五日經過すれば頭部の方が透明になつて来る。間もなく破つて頭を出す。左右に振りながら殻から脱け出し、之から二週間ばかり不潔物を食べて成長する。はじめは白色圓柱形の粗毛を有する盲蟲で、尙ほ肢をも缺く。頭部には二本三關節よりなる短い觸角があり、腹部最後の一節には二本の小鉤が備へられてある。運動の仕方は頗る異様で、鉤と粗毛とを使用し、體を捻りながら轉帳して進行するのである。之が順次成長するに従つて赤褐色を帯びて来る。倍彌々成長すると、口から絲を出して塵埃を纏め、粗末ながらも繭を造つて其の中に蛹化し、二週日ぐらゐの後に成蟲となる。初めは灰色であるが次第に本來の銅褐色と變する。都合卵から成蟲になる迄には三十餘日を要するが、氣候によつては多少遅速は免れぬ。尙ほ他にも譯があると見えて、予が飼育したところの蚤

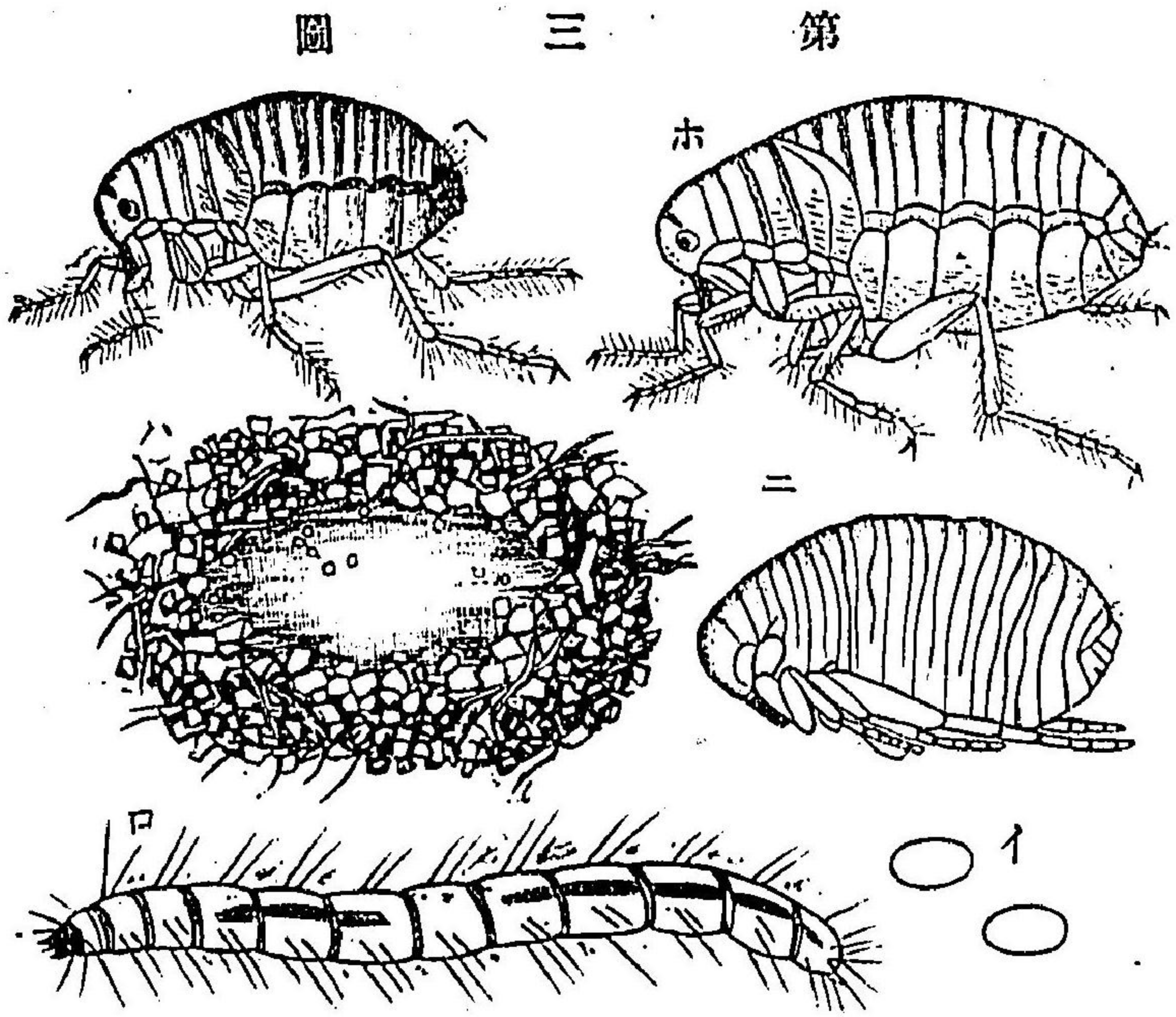


は、卵より孵化する時は大差が無かつたけれど、蛹化する時には既う二日の遅速をあらはし、成蟲となつて現はれる時には四日の差となつた。すなはち最初のは二十九日目、最後は三十三日目、しかも此卵は同じ母體から産附せられたものである。

其の食物に就いて或る人は、俗に云ふ蚤糞は幼蟲の食物であると云ひ又或る人は、蚤が己の吸収せる血液を幼蟲の口に吐き込んでやるのだとも云ふ。しかし此二説は恐らく臆測であらうと思ふ。

かくて普通成蟲で越冬し、嚴寒の頃は、暖いところを擇んで冬籠りをきめこんで居るが、時には、居處裡や炬燵の近傍に微行して、暖をとりつつある人様に齒をかける厄介者。生活期限の三年に亘るは敢て珍らしくはない。

一度に産下せられる卵數は六、八、まあ、此數が普通である。斯くて年三回の發生をするのであるから。蕃殖の力も少ないとは云はれぬ。



蚤の經過 (一) 卵子 (二) 幼蟲 (三) 蛹 (四) 成蟲 (五) 同 其れに、空中に曝露されるものとは違ひ、産下せられた卵には迫害が少ないので或る事變のない限りは殆んど孵化するものと見てよい。やがて、是等が毎夜襲撃を試みるやうになる。但諺に

蚤の夜詰に蠅の朝起



といふ

根氣くらべ では覺束ないから、英國のケント地方では、毎年三月一日に、蚤除の式を行つて戸を鎖す。我が國で行はれる福は内鬼は外と一寸似たところがある。又、サツセキス地方では同じく此日、玄關口の階段を奇麗に掃除する。驅除藥品としては一般に、フレアーベニーといふ草を使用し、露西亞に於ては、高加索地方に生ずるハイスレリユームから製した薬を使用すると云ふ。我が國に在つては、蚤除の式といふやうな事は聞き及ばぬが、民間では

四月八日 灌佛の日に大掃除をやれば、此患害は除かれると云ひ傳へて居る。成る程是は良いに違ひ無い。蚤共が唯一の巢窟と頼む蟻の下の塵埃を浚つてしまふので、今に躍り出さうと英氣を養つて居る蛹、幼蟲、卵などが取り除けられる勘定、本地垂跡の説以來、之を四月八日に結びつけた御手際はすごいものだ。も一度土用頃此法を行へば、寂しく感じ

る迄に無くなつてしまふので、除蟲菊粉の沙汰にも及ぶまい。

萬寶全書 に曰ふ。

『五月五日午時。採石菖蒲晒乾爲末。放簾下則蚤永無矣。』

五雜組 に曰く。

『以桃葉煎湯澆之。則蚤盡死。』

すなはち、石菖蒲の粉末桃葉の煎汁の有効なる事は、昔から知られて居たものだと云ふ事がわかる。他に、蟻の下に胡桃の葉を、一蟻につき拾枚ぐらゐの割合に並べて置くも、其の繁殖を防ぐ事が出来る。併し、

最良法 は大掃除に超した事は無い。藥學博士溝口恒助氏の言はれたことに

『大阪では、ペスト病流行の爲めに度々大清潔法を勵行した。従つて蚤は著しく減じた。此打撃は直接賣藥店の頭に落ちて、蚤取粉の賣上げ高は大に減じられてしまつた。』



以て思ふべしである

さりながら、一般に良く此大清潔法が行はれぬかぎりには、又除蟲菊粉も驅除薬として、頗る重要な位置を占める品である。けれども、此除蟲菊粉使用については、大に注意しなければならぬ事がある。其れは此効力が認められてから、非常に販路が擴まつたので、該品に不足をつげるやうになつた。ところが、利と云へば蟻の甘きにつくが如き

**我利一點張り** の乞食商人共は、いや我利々々亡者共は、徳義も衛生も其處のけにして、除蟲菊粉中に、ピクリン酸を混じて販賣した事である。然れども、天網恢々疎にして漏らさず。其の奸手段は忽ち曝露してしまつた。

元來ピクリン酸は、皮膚を刺戟して腫物をこしらえさせるやうな有害物であるから、蚤などにも効果があるので、多くの人は知らずに用ゐて、商人共に甘い汁を吸はれて居たのである。ところが、或る人が、飼犬に

澤山蚤が居るから之を取り除いてやらうと、湯浴みをさせた後に、其の粉を振りかけてやると、あはれ間もなく脱毛して皮膚はたゞれ、二目とは見られぬ痛たゞしい姿に變じてしまつた。獸醫の診察を受けて見ると、全くピクリン酸の爲であると分明したけれど、今更改し方が無い。政府は賣薬に手をつくすやうでも、未だ此様な不安の現象が時々あらはれる。尙ほ聞くとところによれば

**害蟲驅除薬** など稱して、十貫匁拾錢とは出ぬ硫酸の残渣を仕入れ、之を小さな罐詰にして、一個四錢の五錢のと、方外な價で賣りつけやうとする商人があるとか、誠に物騒千萬、能書きや廣告をあてにしてうっかり薬も買はれた義理では無い。

**大國民中に此んなバチルス** が有るかと思へば、少しく心細くなる。商權擴張の失敗がちなもの、斯かる奸者に勝手な眞似をさせておくからである。



こんな危険を冒して除蟲粉を買ふにも及ぶまい。僅の地面を有すれば、大した手數もかゝらず、純粹なる該品が得られるのである。左に簡単に要項を述べやう。

**ノミトリコ** の原料に二種ある。ノミトリギク又は除蟲菊と云ふ時は、此二種を含んで居る。其の二種と云ふのは、**ダルマシヤギク**、及び、**ベルシヤギク**の事である。

**ダルマシヤギク** *Pyrethrum Cinerariiformis.*

は、其名の示す如く菊科植物で、花は大形白色、花部は密生して居て多肉である。まかし、病菌に犯され易い弱點を有して居るので、深く注意せぬと、苗床は健全で離れても、移植後二三年目に株根全滅の慘害を被ることは少なくない。

**ベルシヤギク** *Pyrethrum roseum.*

前種に比較すれば花輪大なれども、舌状花は少い。其の花の色は、赤、

紅、本紅、桃、絞りなど種々様々に色どられて居るので、觀賞用として栽培するも面白い。殊に病菌に對する恐れが少ないのが何よりであるが、一株の花數が前種より少いと云ふ缺點がある。まかし、此點は株數を多くすれば補ふ事が出来る。

此二種は何れも明治十八九年頃の渡來で、農商務省から紀州地方に配附して試作せしめたのが栽培のはじめであらう。而して、其の除蟲の効果は先づ甲乙無しと云つてよからう。では其の有効成分は何處に含まれて居るかと云ふと、第一が雄蕊にある花粉（然るに此處に魔酔もせず受胎の媒介を爲すハナアブ、ハナバチあるも妙ならずや）之に次いで雄蕊雌蕊花瓣、葉莖で、根部にも幾分は含まれて居る。

**播種期** は春三四月頃ほひと、秋ならば彼岸前後、其の他何れの時でも發芽は大概見られるが、大寒中と土用中とは不結果に終る。

**苗床** は手近な日當りのよい濕潤ならぬ土地を擇び一尺位の深さに耕



やし、土塊を碎き、人糞尿をかけてから五日ぐらゐ経過したら、又手を入れて土塊を細くする。

**種下し** は土地を丁寧に均らして後、一坪に二合程を限りとして蒔きつけ、木灰を少し撒布してから、種の隠れる迄に細土を篩ひかけ、次ぎに發芽を妨げぬやうに地上三四寸を隔て、日覆ひをしておかねばならぬ。いよゝゝ發芽したならば土地の乾濕に注意し、時々日光にあてゝやる事が必要である。かくて、二三葉が現はれたなら日覆を取り除け、二ヶ月ぐらゐを程度として本畑に移植するのである。

**移植** する本畑は、濕氣の多いところを忌む。已むを得なければ高く畦を作つて此處に植ゑるがよい。而して、植込みの深淺と株間の間隔とは、其の成育に關係ある事は勿論である。されば、莖ぎわと地面とは平ぐらゐに植込み、株と株とは五六寸の間隔をとつて互目に位置させるがよい。然る後二日に一度は下水或は稀薄な人糞尿を五六回やるのである。

が、此處に注意を要する事は、移植後の根のつき工合は、夏季に行はれるものが、餘り面白くないと云ふ事である。

**施肥** は秋季が最も適當して居る。春季に之を行へば開花期を後れしむる不利益がある。もし春季に此必要があるならば、人糞尿のやうな速効肥料を用ゐる。其の他の肥料としては人糞尿の他に、燐酸肥料、 $\text{P}$  粉、木灰などである。それから

**手入れ** としては、春秋二期ぐらゐは雜草を除いてやるけれど、中耕などはしてやらぬ。下手に中耕のつもりで株の近所をつくと、却つて根を傷つけて枯死の基を爲すやうな事がある。又灌水の必要は殆ど無い。もつとも、土地が高燥に失するところなれば此注意を拂はねばならぬけれど、さも無ければ放任しておく、かくて、三年四年と経過する間には株根が腐つて、次第に株は高くなり、花は小形になるから、

**根分け** の必要が起る。時期は春秋の二季に擇ぶ。總じて云ふと初秋



の根分けが佳良である。

**摘花の時期** は開花の時期、開花の時が摘花の時で、一株の花にしても同時には開かぬから、開いたのから順次五六回に摘み取るのである。其の方法は、中指と食指との間に花梗を寛やかに挟み、之を引けば容易に手の中には入る。摘み集めたならば

**乾燥** の運びに移る。初め一日は日陰干にするがよい。其れは先きに述べた通り、最も有効成分のあるのは花粉であるから、之を直接日に晒すと、花粉の飛散する恐れがある。日陰で一日も干せば、花瓣は内部へ向つて収縮するから、其飛散を豫防する事が出来る。次に三日も日向に出せば、掌中に揉めば粉末となる程度に乾燥してしまふ。乾燥の後には湿氣を受けぬやうにして貯藏しなければ無効のものとなつてしまふ。而して、製粉は隨時に行ひ得られる。其の方法は

**如何なる方法** でもよい。少量を製するには薬研で碎き篩でふるひ分

け、やはり湿氣を受けぬやうに貯へ置き、必要に應じて使用する。而して、細末にすれば細末にする程効果がある。此純粹のものは澁味が強いけれど、混合物があれば其の澁味が遠ふ。で無ければ色に違ひがある。然れども、色が悪いから之には混合物があるとも断定出来ないし色がよいから純粹だとも云ひ難い。簡易な鑑別法は、嗅覺と味覺の力を借りるが輕便である。眼にたよる色は兎角欺かれ易い

**其の收穫** は一段歩から拾五貫ぐらゐは普通である。是を安積りにして壹貫匁參圓としても四拾五圓、利益の有無は説かずとも明らかである。現今では、年々栽培者が増加の様様であるけれども、未だ外國からの供給を絶つ事は出来ない。僅の土地があれば

**自家用** ぐらゐは何でも無い。殊に農家にとつては、他の害虫驅除殺蟲劑として用途が頗る多い事故、畑の隅底の隅などに植ゑつけておけば非常に好都合である。尙ほ其の花は



観費用 としても充分趣味があるではないか。それに加へて此莖や葉は、夏の夜の蚊遣りとして他に勝る數等なるを知らば、僅の種代や播種移植根分ぐらゐの勞は、如何しても惜む氣にはなれまいと思ふ。ともかくも蚤出で、ノミトリコが必要が起つたので、彼現はれて此弊價益々揚るは、之も何かの因縁であらう。其は兎もあれ

吾人と密接の關係 ある蚤、現在血を分けてやる蚤共は、文學上に於いては何程の價値を認められて居たのだらう。山東京傳は、猫の蚤を三文づつで取り除き、以て糊口の資とした男があると、西鶴の遺書から轉載しておいた。猫の蚤既に

三文の價値 が有つたのだ。苟も唯我獨尊萬物之靈長と自ら許す人の蚤、それが殊に文學上の蚤と云へば、餘程價が貴い筈である。然れども惜しい哉。アナニエヤにはじまつた言靈のさきはふ國に生を受けながら古代歌人の眼球 は蚤の眼玉より小さかつたので、見る可きものが一

つも無い。余に

大男ゆかもとゝろく寝がへりうてば

人食ふ鹿のかなた逃ぐ見ゆ

大山鳴動して鼠一匹とは之であらう。人食ふ鹿が振つて居る……と誰やらの評を其の儘借りて、さて俳句抄を繕けば

|               |   |
|---------------|---|
| 蚤 蠱馬の尿する枕もと   | 桃 |
| 隙明くや蚤の出て行く耳の穴 | 丈 |
| 世の中や身に身を隠す猫の蚤 | 來 |
| 銅の蚤かとはかり眺めけり  | 旨 |
| 高飛の身を白浪や船の蚤   | 同 |
| 蚤にかへす裏珍らしや妹が衣 | 同 |
| 縫箔のよしの龍田に住む蚤ぞ | 同 |
| 蚤を逐ふ心や唐の吉野迄   | 曉 |



蚤の跡夫れも若きは美しき 一茶  
蚤の跡敷へながらに添乳哉 同  
蚤咬んで寐せて行くなり猫の親 同  
とべよ蚤同じことなら逆の上 同  
疫病神蚤も負はせて流しけり 同  
蚤どもに松島みせて放ちけり 同  
木の猿や蚤を飛ばせる犬の上 同  
蚤飛べや野らは刈萱女郎花 同  
飛ぶな蚤それこそが隅田川 同  
草原にこそすり落すや猫の蚤 同  
まゝつ子や晝寝仕事に蚤拾ふ 同

など眼にうつる、中にも一茶が昆蟲に關する句を一番廣く用ゐて居る。其れが蚤一種に限らず其の他に於ても然り。しかも良く其の性を看破し

て、巧に詩化する手腕はすごいものだ。之を要するに、一茶は昆蟲に對して、文學の重因たる同情が殊に深かつたのである。

よぼくと蚤這ひ出でぬ紀元節 氷桃

同情と云へば

グリームの童話 の中に、次ぎの一話がある。

THE SPIDER AND THE FLEA.

A Spider and, a Flea dwell together in one house, and brewed their beer in an egg-shell.

One day, when the spider was stirring it up, she fell in and scalded herself. Thereupon the Flea began to scream. And then the Door asked,

“Why are you screaming, Flea?”

“Because little Spider had scalded herself in the bear tub,” replied she.

Thereupon the Door began to creak as if it were in pain; and a Broom, which stood in the corner, asked,



"What are you creaking for, Door?"

"May I not creak?" it replied.

"The little Spider's scalt herself,  
And the Flea weeps."

So the Broom began to sweep briskly, and presently a little Cart came by, and asked, the reason.

"May I not sweep?" replied the Broom.

"The little Spider's scalt herself,  
And the Flea weeps;  
The little Door creaks with the pain.

Thereupon the little Cart said,

"So will I run," and began to run very fast past a heap of Ashes, which cried out,

"Why do you run, little Cart?"

"Because," answered the Cart,

"The little Spider's scalt herself,  
And the Flea weeps; .

The little Door creaks with the pain,  
And the Broom sweeps."

"Then," said the Ashes,

"I will burn fiercely."

Now, next the Ashes there grew a Tree, which asked,

"Little heap, why do you burn?"

"Because," was the reply,

"The little Spider's scalt herself,  
And the Flea weeps;  
The little Door creaks with the pain,  
And the Broom sweeps;  
The little cart runs on so fast."

Thereupon the Tree cried,

"I will shake myself!" and went on shaking till all its leaves dropped off.

A little girl passing by with a water-pitcher saw it shaking, and asked,

"Why do you shake yourself, little Tree?"

"Why may I not?" Said the Tree;

"The little Spider's scalt herself,  
And the Flee weeps



The little Door creaks with the pain,

And the Broom sweeps;

The little Cart runs on so fast, And the Ashes burn."

Then the Maiden said,

"If so, I will smash my jug;" and she threw it down and it broke.

At this the Streamlet, from which she drew the water, asked,

"Why do you break your jug, my little Girl?"

"Why may I not?" she answered; "For,

The little Spider's scalt herself,

And the Flea weeps;

The little Door creaks with the pain,

And the Broom Sweeps;

The little Cart runs on so fast,

And the Ashes burn;

The little Tree shakes down its leaves;

Now it is my turn!"

"Ah then," said the Streamlet,

"Now I must begin to flow."

And it flowed and flowed along, in a great stream, which kept getting bigger and bigger, until at last it swallowed up the little Girl, the little Tree, the Ashes, the Cart, the Broom, the Door, the Flea, and, last of all, the spider, altogether.

#### 蜘蛛と蚤

蜘蛛と蚤とが一つの家に共に棲んで居た。そして、一つの卵の殻に麥酒を醸造して置いた。

或る日のこと、蜘蛛が其の殻の上で働いて居るうちに、如何したはづみか中に落ち込んで火傷したので、蚤は大声で叫び出した。すると、戸が聞きつけて

『何故まあ君は叫ぶんだね』

『勿論、あの蜘蛛が麥酒の中で火傷したから』

と答へた。

そこで、戸は、自分がやはり其の苦痛でも受けて居るやうに、キ



イ／＼軋り出した。すると、隅の方に立つて居た箒がき／＼つけて

『何故まあ君は左様キイ／＼やるのだね』

問はれて戸は

『如何して軋らずに居られやう』

小さな蜘蛛が火傷した

そうして蚤は泣いて居る

箒はフーンと思つて、さつさと掃きはじめた。程無く來かゝつた

小さな車が、其の譯をきくと

『如何して掃かずに居られやう』

小さな蜘蛛が火傷した

そうして蚤が泣いて居る

戸も痛そうに軋るので

と答へた。そこで小さな車は

『では、僕も走らう』

云ふや否や非常な勢で、灰がうづ高く盛り上げられてある其の上を、泣き叫びながら走り出した。

『如何したんだね』

問うたのは灰である。

『あたりまへさ』

小さな蜘蛛が火傷した

そうして蚤は泣いて居る

戸も痛そうに軋るので

箒もたまらず掃いて居る

之を聴いて灰は

『私も燃えすばなるまい』

其の次に、一本の木が斯う云つた。



『何を左様燃えるかい』

『きまつて居らあ』

小さな蜘蛛が火傷した

そうして蚤は泣いて居る

戸も痛そうに軋るので

箒もたまらず掃いて居る

車もガラ／＼駈け出した

そこで木は叫んだ。

『僕もグサ／＼揺すぶらう』

云ひ終るや、枝にあるかぎり落ちてしまへと揺りはじめた。

此時、水瓶を持つて通りかゝつた少女は、是を見て

『何故そんなに自分で揺すぶるの？』

『何故つて？ 僕は……』

小さな蜘蛛が火傷した

そうして蚤が泣いて居る

戸も痛そうに軋るので

箒もたまらず掃いて居る

車もガラ／＼駈け出した

灰も烈しく燃え出した

少女は

『そんなら妾もこれを……』

と云ひさま投げつけたので、水瓶は壊れてしまつた。

すると水を汲み出したところの小川が

『如何して其様な事をなさるので、お嬢さん!!』

『如何してつて？ 其れは』

小さな蜘蛛が火傷した



そうして蚤が泣いて居る

戸も痛そうに軋るので

箒もたまらず掃いて居る

車もガラ／＼驅け出した

灰も烈しく燃え出した

木さへ其の葉をふり落す

だから妾も投げたのよ

『嗚呼其れで！ では私も溢れねばならん』

と云つて溢れ出し、とう／＼、少女や木や、灰、車、小川、蚤、

蜘蛛、などを、残らず呑んでしまふまで大きな水となつて流れ走つた。

罪の無い話ではないか。云はずともお伽噺の性質として、子供の想像に形態を與へ、讀者聽者の品性の醇化を促がす點に於いて、教育上

多大の効果 あるは否まれぬ事實なるにもかゝらず、時に生ずる一面の小弊を見て、彼の十八世紀頃のナシヨナリズム一派のやうに、事實無根の嘯誕なる事を教ふるもので、理として見るべきものが無いから、教育上排斥しなければならぬ……と様に考へて居る者がある。之は小供の發達を忘却して居るところから起つた誤解なる事は、敢て多言を要せぬ。左に掲げる一話は、余が兒童研究の材料にと思つて、數へ年拾貳尋常六學年の一少年を捕へて、作らしめたものである。

蚤と農夫

或るところに、一人の農夫がありました。或る時、畑へ行つてたがやして居たが、蚤が喰ひついて仕方がないから、着物をぬいで幾つも取つて、ひねりつぶし、もう、これでよからうと、着物をさながら

『蚤といふ蟲は、人に喰ひついて、仕事のじやまをする悪いや



つだ』

と獨言しますと、まだ、殺されなかつた一匹の蚤が『なに馬鹿をいふのだ。百姓め。おまへの畑をたがやすのが仕事なら、おれが、人に喰ひついて、血を吸ふのも仕事だよ』と云ひました。農夫は、困つて返事が出来ませなんだ。

熟讀含味したならば、蓋し思ひ半に過ぎるものがあらう。さて此處に血を吸ふのも仕事 有るか無いかは別として、彼等が他の多くの哺乳動物及び鳥類などに附着して、所謂半寄生生活を營みつゝある事は事實である。すなはち  
人や犬猫鼠を苦しめる

ヒトノミ *Pulex irritans* L.

をはじめとして

人や犬猫にとり附く

イヌノミ *Ctenocephalus Canis* Curtis.

本邦固有の

ネコノミ *Ctenocephalus felis* Bouche.

主として鼠を苦しめるので其の名ある

ネヅミノミ *Ceratophyllus anisus* Roth.

人馬特に家禽中鶏類の眼瞼に寄生すると云ふ

トリノミ *Argasysilla gallinacea* Westwood.

貂栗鼠に普通なるは

リスノミ *O. penilliger* Gr.

蝙蝠の血液を吸ふ

カハホリノミ *C. pentactenus* Kol.

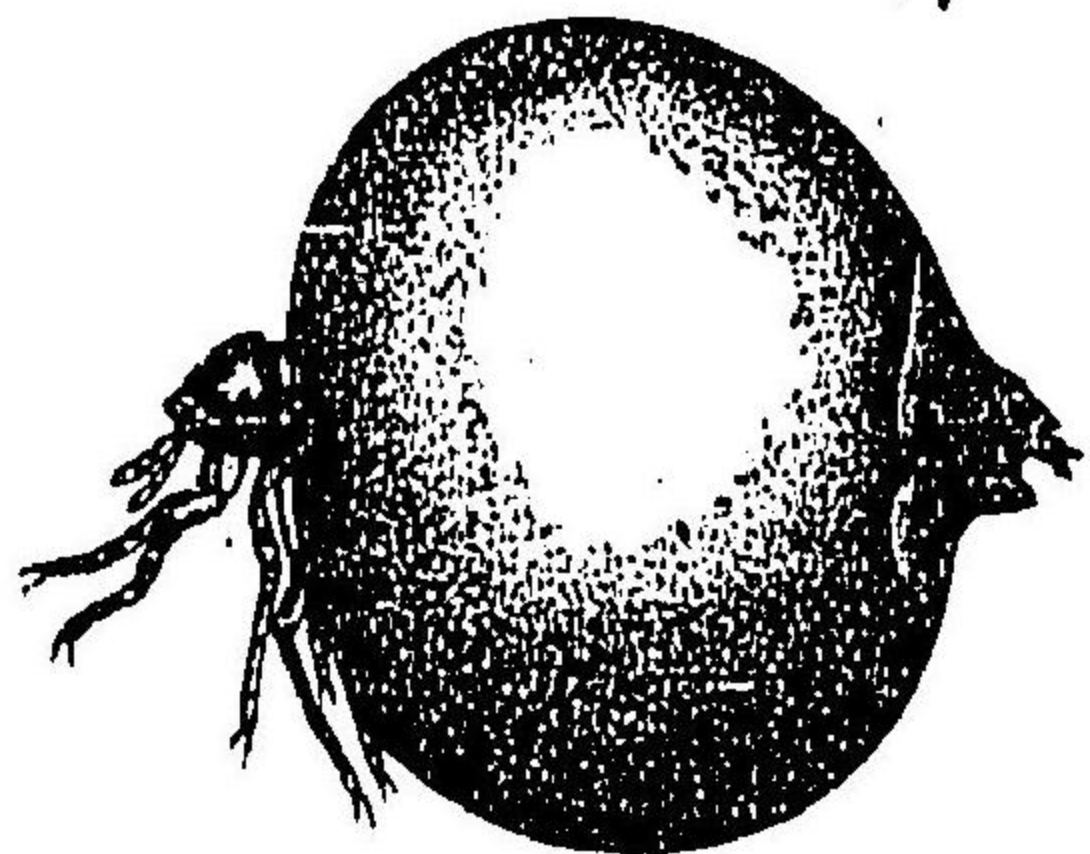
幸にして、我が國には居らぬけれど、南米ブラジル地方に棲息する

スナノミ *Sarcopsylla penetrans* L.



は、普通の蚤より小形にして體は褐色、雌雄によつて其の體形は著しく異なつて居る。雄は頭部が稍々三角形を爲して居るほか、普通の種類に似て居るけれど、雌は特別に腹部が膨大して球状を呈して居る。形狀か

圖 四 第 (比)



オ

ス

ナ

ノ

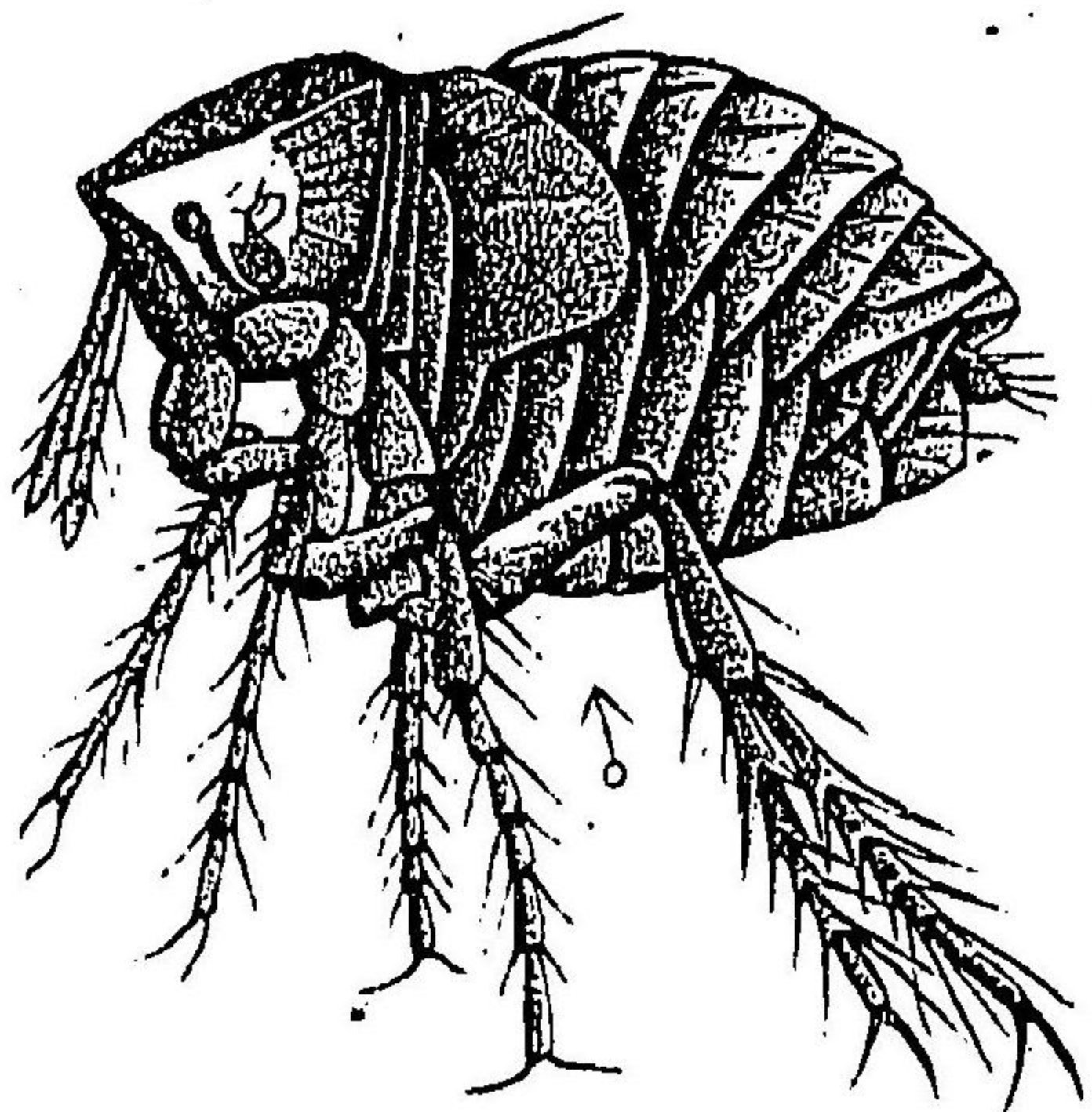
ミ

ら云へば雄の方が瘁猛らしいけれど、事實は全く是に反して居る。すなはち、雄は砂中に居住するにもか、はらず、雌は隙を窺つて、一般哺乳動物の足の裏、殊に爪と肉との間に食ひ込み其の中へ卵を生み込む。感官の有る者なら、此様なものに食ひ込まれたり、卵を生

み込まれたりする時には、少しは何とか感じ相なものだと思はれるが、感じられては彼等にとつては大に都合が悪い。極めて巧に感せしめぬやうに仕事をしてしまふ。之だけなら餘り恐るゝ事もないけれど、數日

の後になると、蚊に螫された時のやうに痒みを覺える。其れが順次度を増して、遂には耐えられない程になる。此時分にはもう孵化して居て、

圖 五 第 (比)



ナ

ノ

ミ

いから、蝨入した皮膚上の紅點を見つけるや、細針を以て之を引き出すと云ふ。



之よりも尙ほ恐ろしいのは、蚤によつて傳播されるペストである。以前は外國の傳染病として、其の猛烈なる事を風の便りにして居たものを、今は既に本土の中央迄侵入してしまつた。明治三十六年の如きは患者五十八人を出し、死亡者は五十名と記された。爾來年々患者は増加し、漸次蔓延の徴候があるので。人心の不安は他病の比では無い。

**其の流行地** に就いて云へば、我が邦土内に於ては先づ臺灣、世界上から云へば印度を推擧しなければなるまい。すなはち、同地に於ての病勢猖獗状態は、明治四十年八月八日、孟買駐在領事、藤田敏郎氏が、同年七月中の狀況報告に依つて知る事が出来やう。

**印度全部** に於ける七月四週のペスト患者は、壹萬九千貳百七拾五人、死亡者壹萬六千四百八拾六人にして、最盛事四月に比せば、一日分よりも少なし。孟買州及びマイソールは近頃患者の數漸次増加の傾となり、其の他は孰れも減少しつつあり。其の筋の公報によれば、一月より六月

二十日に終る即ち半ケ年の印度全體のペスト死亡者總數、百六萬六拾七人なり。千八百九拾六年以來最多の數なりしは、千九百四年にして、一ケ年の死亡者總計百貳萬貳千餘人なれば、本年は未曾有の數に達したりと云ふべし……されば

**英國のペスト研究委員** は、早くより其の地に赴いて、種々なる研究をして居たが、其の功空しからず。ランブ氏、リストン氏等は、遂に蚤がペスト病毒を人間に媒介するものであるとの事を發表した。是より以前、醫學博士緒方正規氏は、明治二十九年、新領土となつた臺灣に渡り、ペストに就いて研究を重ね、左の

**二論旨** を、其の當時の本邦醫學雜誌及び獨逸の醫學雜誌に掲載された。

(甲) ペスト病は、本來人間の傳染病には非ずして、鼠族間の傳染病であらうと思ふ。人間は、ペスト病鼠から之を傳染するものであら



う。而して、ペスト病に對し、最も適切なる病名を付けたものは實に臺灣人であらう。

(乙) 予は臺灣に於て、ペスト病鼠に寄生した蚤を捕へて検査したのに夫に有毒性のペスト菌を含有する事を發見した。そこで余は、蚤は鼠族間にペスト病毒傳染を媒介するのみならず、延いて人間にも寄生し、人間にも其の病毒を傳染せしめる。

と、即ち流行學上から、人間と鼠との中間に立つて病毒傳染の媒介をするものは、病鼠に寄生するところの蚤で、斃鼠の身體が冷えるに従つて離散し、之が人間につく、其の刺整部からして病毒が人體にうつされるといふので、此點に就いては

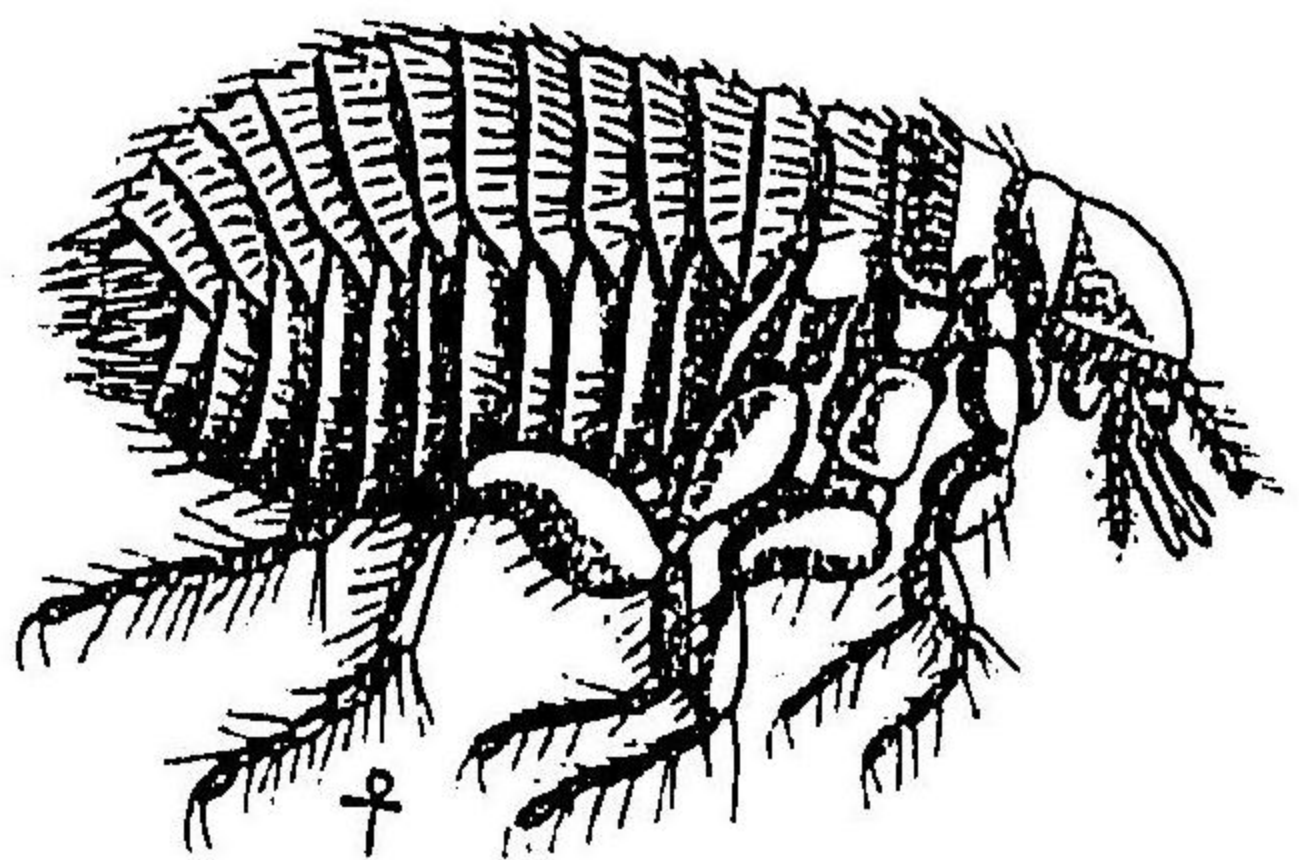
緒方氏が先鞭をつけられたのである。而して、臺灣人は、本來が鼠族の傳染病だけれども、人間にも容易に傳染する性質のものなる事を知つて、之に鼠疫或は斃鼠病と云ふやうな意味の名を、以前から附けて居

た。

斯く云へばとて、鼠族に寄生する蚤は、必ず人間に寄生するものか否か

(昆)

第六圖



は未定の問題である。之が問題であるとするれば、鼠族に寄生する蚤の種類を第一に確めねばならぬ、されば

ドクトル、カロ、チラボシー氏は、之を動物學上より研究して、西曆千九百三年に、得たる結果を發表せられた、之に依れば

大鼠に寄生するもの……………四種  
家鼠に寄生するもの……………四種

騾鼠に寄生するもの……………三種  
森鼠に寄生するもの……………一種



之には共通のものもあるので、蚤の種類は五種ある中三種は人體に銜はむけない。残つた

ヒトノミ *Pulex irritans* L.

イヌノミ *Pulex suraticeps* Tschb.

に就いては警戒を要するわけになる。

ヒ  
そこへ来て 明治四十一年十二月

ト  
北里宮島兩博士 理學士小泉丹氏、高野

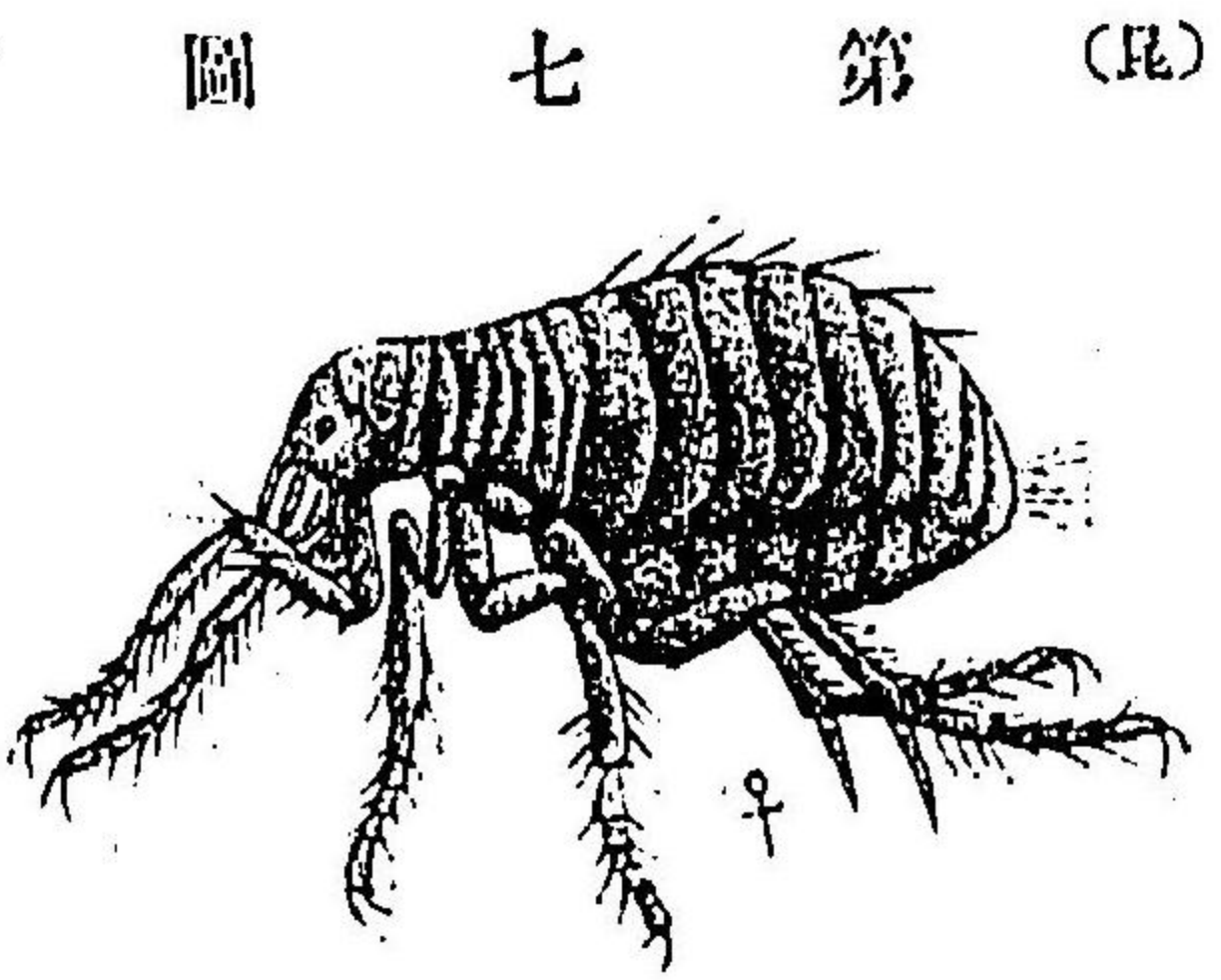
ノ  
親雄氏が、兵庫縣津名郡由良町に於けるベ

ミ  
ストの調査報告は、實に有力なる證明を興

へられた。其の結果は、印度に於けるベ

ト調査委員が長年大計畫を以てベスト流行

の要約を精査して得たる結果と同一であつたのである。すなはち從來存在の不明であつた印度蚤が、病媒媒介散布の頭棟で、其の他の、鼠に寄



第七圖 (昆)

生する蚤に於ても、其の移行性と吸血力と蕃殖の状態とに比例して多少の危険ある事が明瞭となつた。而して

鼠に寄生 する種類として、明かになつたものは

インドノミ *Pulex cheopis* Rothschild.

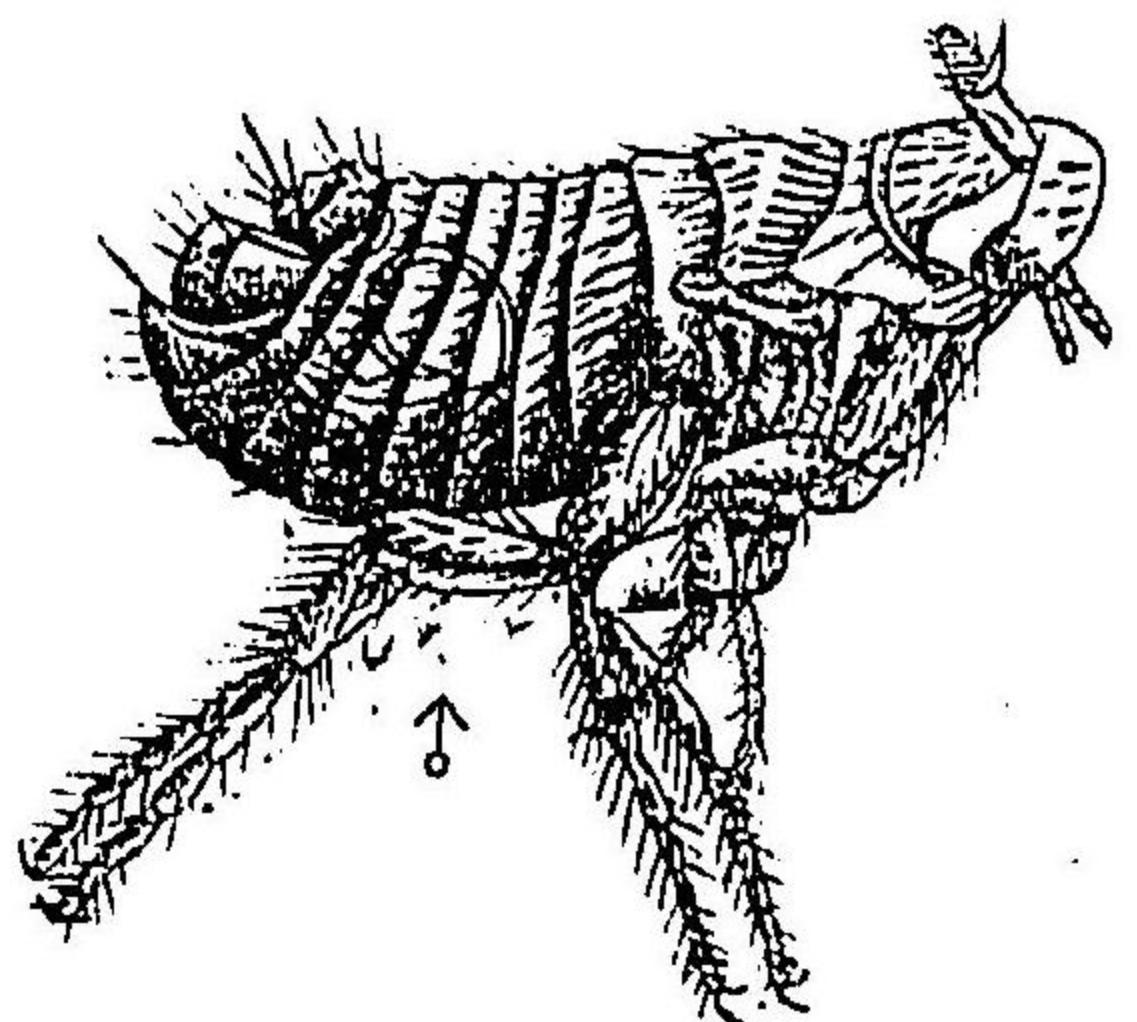
メ  
メクラノミ *Ctenopsyllus musculi* Duges.

ク  
ヒトノミ *Pulex irritans* L.

ラ  
などで、中に最も多いのが、千九百三

ノ  
年ロスチャイルド氏に命名されたところの、熱帯地方鼠族に普通なる、イン

ドノミ、稀なのがヒトノミ



第八圖 (昆)

猫について 調査した結果は、チコノミ、ヒトノミ、セラトフキルス属、などあるけれど、其の病感受性は非常に弱い。此處に於てか先年來遊の



コツホ博士 が、ベスト豫防の一策として、各家猫の飼養を唱導せられた理義が明白となる。會て、印度のベラール駐在醫長ブカンナ氏が、猫とベスト流行の關係に就いて

『猫数が戸数の半以上ある村には、流行一回も無く、戸数の五割乃至貳割の飼猫數ある部落は、稀に患者を出すのみなり』

と云はれたのも、歸納的斷案として有力なるものと考へられるが、是より昔の昔の太古

回々教の開祖 マホメットは、宗教上より、無智なる民にベストの豫防策を教へて居たのは感心では無いか。曰く

『猫を神聖なるものとして、常に之を飼へよ』

と、さればと云つて、如何なるものでも猫でさへあれば善いと云ふ譯にはいかぬ。能無し猫は千匹飼つても、雀威しの案山子ぐらゐのもので、捕鼠の役には足りない。之もコツホ博士來遊間も無い時の事、東京淺草

區千束町一丁目

飼猫販賣所 と云ふ店が現はれ、續いて本所區松倉町二丁目へも支店を開業した。其處の婆さんの口上が振つて居る。

左様です。飼ひ猫になさるのは第一毛並、第二が性質で、先づ毛並は黒斑の牛勞尾で、夫れが三毛、虎、斑、黒、白とあつて、黒と白とは一番高價です。

又性質には、チョコ、トコ、ヘコ、チコとの四種があつて、春兒は蝶々を取る癖があるからチョコと云ひ、トコは夏兒で鶏を覗ふ癖があります。ヘコは夏の末から秋へかけての生れで、とかく蛇を覗ひ、冬兒が眞のチコで鼠一點張ですから、之が一番高いのです。

其の價はと云へば五圓以上拾圓以下、何が標準やら一寸見當がつきかねる。もつとも暹羅猫の良種は、彼地に於ても五十圓ぐらゐはする相だから



ら、其れを思へば安い部類かも知れん。安いにしても高いにしても在來の猫は氣に喰はん。同じ飼ふなら高貴猫(Nobis)の稱あるシヤムネコがよい。玩弄しての飼養なら、毛の長い身體の大きい色の美しいアンゴラネコ(Felis maniculata Angoranis)又の名ベルシャネコにかざる。何れにしても死しての後は、多く

三味線の皮と残るが關の山だけれど、埃及に於ての彼等の祖先は頗る禮遇されたものだ。今も猶存する猫のミイラが即ち其の證據である。之は生前の愛を忝うした事は勿論、落命の後は幸福の神として、人間のミイラと同じく白布で能く包み、注意して乾燥させたもので、三角塔時代より行はれたものらしい。こんな物でも

禍も三年の壁へに漏れず、其の骨格皮膚などから考へて、今日埃及の東北すなはち亞非利加の東北ニルタルに近いブバステス。ペンニイ。ハッサン等の諸方に棲息するハンネコ(Falbetze)と、同一物だと云ふこと

が認められ、延ひて

猫の根源地は、亞非利加の東北ナイル川に添ふた地であると迄考證が出来たのである。其は別問題としても、コッホ博士來遊以來、猫が聲價を高めた事は非常なもので、ふと忘れられた猫さへ笹村翁に拾ひあげられ、博士が日本の海を船出の際、是が紀念としてコッホと命名せられ、今は

小梅の邸に大きな顔をして居る始末、戸口調査や頭數算定に異外の笑話を作り出したのも時勢とは云ひながら、一寸妙な感に打たれざるを得ぬ。ところへ横から異論が出た。之も

聞き捨てにする事はならぬ。曰く

猫は日本家屋に適せぬ。何故と云へば、彼は所嫌はず勝手に歩きまはる。其の足で遠慮なく座敷へ押し上る。西洋風の床ならば良いにしても、日本のやうに、畳の上に坐るやうに出來て居る家に



於ては不適當である。

ところ嫌はず歩くと云ふ事から考へても、傳染病流行の際などは殊に危険のものではないか。

其れに、果してペスト豫防に有効なりや否やは問題である。猫さへ多く飼養すれば、又猫は鼠さへ捕れば有効だと考へるのは、少しく早計に失して居りはせぬか。

人も知る如く、猫が捕鼠した時に、直ぐ全部食べてしまふやうな事は無い。彼は鮮血滴る獲物をさも愉快げに暫く弄したる後に漸く賞味する。若し假りに之を有菌の鼠としたら如何であらう。恰もペスト菌を撒布するやうなものではあるまいか。又ペスト菌は猫を侵すや否やは別問題として、其の菌のある鼠を啣へた猫の口や糞に、菌の附着する事は疑ひ無からう。まかし之が流行期で無ければ餘計な心配かも知れない。

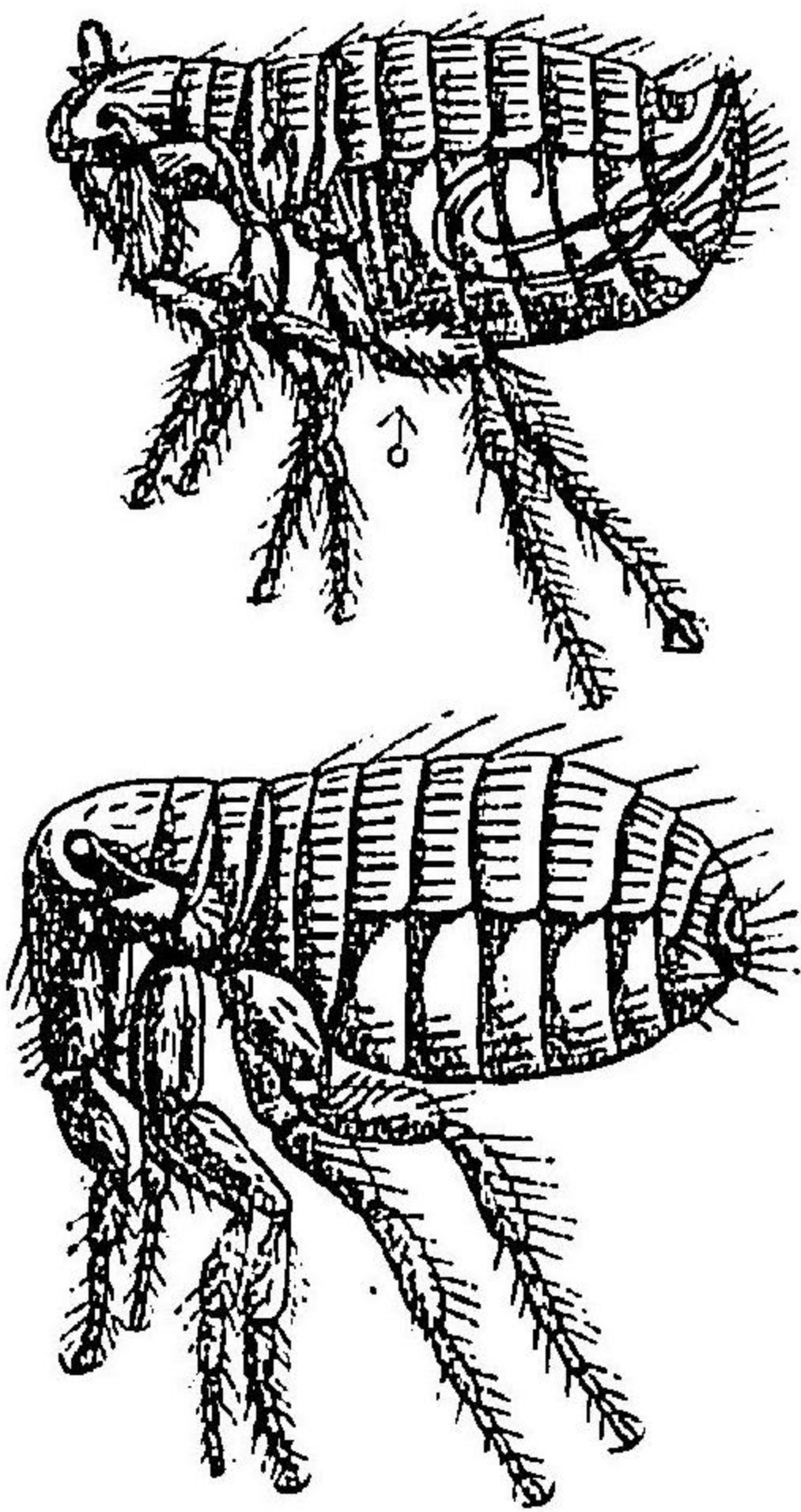
尙ほある。日本の鼠には條蟲が多い。之を食した猫には當然寄生する。此條蟲は一種特別で、其の一節一節が切れて落ちては室の隅などに蠕いて居る。

も一つ考ふべきは排泄物である。コッホ博士の報告に随つて各家一猫飼養としたらば、差し當り排泄物の所分に困りはせぬか。猫の便通は一日一回づつで、量は一回拾匁以上だから、一ヶ月三百匁以上となる。之が縁の下などにやられるのだから、衛生上輕忽に取り扱ふ事は出来まい。

と、是非は暫く措き、何れにしてもペスト病毒撒布の頭棟は鼠族であるから

之を全滅 してしまへば、あとは有菌鼠を離れた蚤に注意を拂へばよい。然るに此蚤は、其の宿主を見つけて血液を吸収しなければ、一定期日の後には餓死せざるを得ぬ。故にペスト患者發生の家屋は、中に棲息





第九圖 (16)

して居た鼠族を撲滅し、然る後嚴重に或る期間の封鎖を行へば、全く危険が無くなる事になる。之について彼の「ホメツト」は、破るべからざる教へを遺してある。

『家に鼯鼠を發見せば、速に草林にのがれよ』

其れかあらぬか印度土人は、今でもベスト流行の時期に、自家の附近で鼯鼠を發見すれば、執着無く其の住み家を捨て、難を遁れ、二ヶ月ぐらゐ過ぎてからのこゝろ歸つて來ると云ふ。

此處まで漕ぎつけて、先づ一服と筆を搦くと、はて不思議、何處とも無

く話し聲が漏れる。耳をすませば縁の下の方だ。やッ

怪しかる奴だな 何々

『如何だい。我輩が日本へやつて來た時の騒ぎと云つたら、浦賀の號砲一發、長夜の夢を破つたあんなものは比較にならない。一寸穴覗きをしただけに、まるで上を下へと鼎の沸へくり返るやうな有様、ハ、ハ、ハ、考へて見ると聊か氣の毒にもなる。』

今では、ベストと云へば三つ兒でも『うんあれか』と知らぬ者はあるまいが、昔はまるで無茶苦茶で、ガアレ時代と來たら、痘瘡でも發疹瘰癧扶斯でも、何でもかんでも急性熱性の傳染病一切をベストと呼んで居たのだ。馬鹿々々しい。我輩の估券にかゝはるぢやないか。しかも其れが、十八世紀頃迄も踏襲せられたるに至つては恐れ入らざるを得ぬ。

しかし、世間には、迂愚や間抜けばかりぢやない、目明き千人盲



千人、瓦礫に混じた寶石も、何時かは玉工の眼に留まるものと見えて、今日では我輩も大いに存在の價値を高めて來た。とは云へ存在の價値を高めた其れだけ、仕事の仕悪く、なつたのは、蓋し豫想外の結果である。

回顧すれば茫として宛然夢の如しだね。其の以前、亞丁のペロポネサス時代に、少しは我輩の技量を示したとは云ふものゝ、未だく、其の勢力範圍は、僅に小亞細亞、埃及、支那、印度ぐらゐのもので、とても御話にはならない。それから基督曆五百四十二年、東羅馬に於けるユスチニアン時代、之が抑も歐洲に侵入する手初めで、彼の下埃及のベルヂウムから二手に分れ、一手は亞非利加の北岸から、他の一手はバレスチナの方面からピシリエンを越えて歐洲に侵入し、次第に全土を風靡して、歳を重ねる事凡そ百五十、聊か花を咲かせたと云ふものだらう。

何満足？。満足などは到底得られるものかい。我輩は斃れて後に已むの覺悟である。さは云へ、精力主義の我輩にも、世の變遷につれて又消長は免れぬものと見え、此處に暫時冬眠の姿となつたが、來りし十四世紀に、千三百四十六年から千三百八十三年頃まで、大に勇を鼓して全歐洲に一大飛躍を試みた。随分壯觀だつたよ。地上に横たはる死屍は累々、北極に近いグリーンランドに迄も遠征した勢力には、流石神の子神の子と云ふ人類も手の出しやうが無く『之は全く天星の災だ』『神の怒りに觸れたのだ』と飛んだ痛氣筋へ我輩の功績を譲つてしまはれたので、心中甚だ不平を鳴らしたが、之も亦塞翁が馬、此機に乗じて意を恣にしてやつたヘッケルとか云ふ男の計算によると、無慮二千五百萬人、即ち全人口の四分之一は、我輩の御供に上つた勘定である。

斯うは云ふものゝ随分酷い目にも逢つたよ。忘れもされぬ千八百



十五年、伊太利のバリエ州ノオヤ港にもぐり込んだ時、先づ緩りそろりと參らうと、少しく油断したのが一生の誤り、忽ち見つけられて町の周圍は二重の塙、丁度此五六年前に旅順で包圍された露國のやうなものさ。

いや之とは比較にならぬ。人間が生活に必要な物品は引き橋から送り込むの他は、絶對的交通遮断をやられてしまったので、翼無き身は如何する事も出来ず。元より蟻の這ひ出る穴も無い。せめて是なりともと思つた書翰送酢に浸すと云ふ始末。脱出を試みて此災にかゝつたものが何程あるか知れぬ。其の包圍の有様を云へば、塙の周圍は守備兵の警戒嚴重で、もしも餘人の之に近づく者があれば、兵士は恐ろしい權幕で叱責し、其れでも命に従はぬ時には銃殺する。とう／＼やられた者もあつた。斯うして置いて吾々同族の巢窟と認められた家屋百九十二戸は焼かれてしまつた

も一つ不意をやられたのは千八百七十八年、アストラハンのエトリヤンカに於て、ペスト布教の策を講じて居ると突然、露西亞政府は軍隊を派して固く封鎖してしまつた。

此二つは決して忘れる事は出来ぬ。何れ機を見て再舉を企て、會稽の恥を美事に雪いで呉れやう。君にも是非一臂を添へて貰はねばならぬ。よしかね天然痘君、逢つたのを幸ひ此處らから始めやうぢやないか。

はつと思つて眼を開けば、醒めて跡無き瞬時の夢路、たどるたよりも消えはて、己が影のみ茫然と、更けゆく時の刻み音、胸の鼓動も急がしく、冷汗かいてキヨロ／＼然。

嗚呼夢。夢だ。實に全く夢であつた。





爾 軀 既 已 輕  
 爾 行 復 能 跳  
 清 王 士 錄

無 加 湯 沐 頻  
 有 時 亦 相 吊



第貳 蠅 FLY

"Dear me! Dear me!"

Buzzed a little bee,

"I'm always making honey.

No time to play,

But work all day;

Isn't it very funny,

Very very funny?"

あはれく

小さな蜂は呻るらく

吾は常に蜜をつくる

遊ぶときもなく



ひねもす働くは

實に其は面白からずや

實に〜面白きかな

日華軒に薰じては 人三尺の陰を争ひ、砂礫は光りを射返して屋内は  
釜中の如く、鬼瓦はカン〜照りつけられた意趣返しに、火でも吐き相  
なけんまくの時にも、蜜蜂は撓ます倦まず、今日爲すべきを明日に譲ら  
ず、明日爲すべきを今日遂げやうと

『立てる農夫は座せる紳士より貴し』  
をほのめかして居る時、之はまた

“O my! O my!”

Hummed a little fly,

“I’m always eating honey,

And yet I play,

All the day,

Isn’t it very funny,

Very very funny?”

あはれ〜

小さき蠅は呻るらく

吾は常に蜜を食す

働くこともなく

ひねもすを

其は實に面白からずや

實に〜面白きかな

と太平樂、此せち辛い世の中に、實に〜面白きかなは吞氣な沙汰であ  
る。吞氣な翅音をさせるだけ

實に〜惡くい奴である 食時などの仕度にかゝれば、忽ち四集して



手を下す。拂へば身を二三尺の距離に平然と置き、手をすり合せたり足を撫でたり、翅の衣紋をつくらうたり、くると頭や顔のお化粧までする。一茶は此時

やれ打つな蠅が手を摺る足を摺る

と大目に見て居たやうだが、如何して此奴、一切自今皆懺悔の所作ならば、特に死一等を減じて追放ぐらゐにしてもやらうが、其んなしほらしい心は毛程も無い……どころか、鬼様留守に縄でも縛はうか。洗濯ざぶくくと、翅の無いのを奇貨として人間の迂愚を嘲つて居る。此處に到つて古人も大に考へた。

五月蠅 と書いてウルサイと訓む、十六と記してシ、と讀ませたり、山上復有山でイヅルなどより數等頭を擡き出して居る。彼の熱情詩人山上憶良の、老身重病經年辛苦及思兒等歌の中に  
許等許等波、斯奈奈等思騰、五月蠅奈周、佐和久兒等遊

すなはち此處ではサバへと讀むけれど、うるさい意には變りが無い。一寸其處らに比喻として引き合ひに出されるにも、よくくの

黄乏籤 にばかり當つて居る。お氣の毒と云ひたいが、元を正せば身から出た錯、自ら蒔いた種は自ら收穫すべき義務がある。詩經に

營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒人。

營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。

營營青蠅。止于榛。讒人罔極。構我二人。

青蠅三章章四句

營々たる青蠅

樊に止まる

豈弟君子

讒言を信すること勿れ



營々たる青蠅

棘に止まる

讒人極むとき罔く

交四國を亂す

營々たる青蠅

榛はらみに止まる

讒人極むとき罔く

我が二人を構かます

段柯古曰く 蒼蠅の聲は雄壯にして、青蠅の聲は清聒、其の聲は皆翼に在り。又曰く。青蠅糞は最も能く物を敗る。玉と雖猶免れず。陸農師は曰く。蒼蠅は善く聲を亂し、青蠅は善く色を亂すと。

烏軍 鸞鳳伏竄して鷓鴣鶴翔し、閻君尊顯せられて讒諛志を得るとも

是一瞬南柯の夢、さめては昔が悔やしかろ。鉛刀を銛しと云へばとて莫耶の斬れ味はやがてわかる。隨夷は隨夷、跣躄は跣躄、荆棘から葡萄は得られまい。疾黎から無花果は無理である。無理が通れば道理は引つ込むだらう。引つ込んだ道理は出すには居らぬ。如何しても

『正義は最後の勝利者』

で、タイムの裁きには如何なる假面も脱がせられる。殊に其れが蠅では何時の世如何なる場所に現はれるにしても、もう通り相場は定まつて居て、鴨綠江の逆流せぬ限り、み空の星が眞砂とならぬ限りは、良い芽の吹きやうが無い。

歐陽脩の憎蒼蠅賦 を見ると

蒼蠅。蒼蠅。吾嗟爾之爲生。既無蜂螫之毒尾。又無蚊虻之利嘴。幸不爲人之畏。胡不爲人之喜。爾形至眇。爾欲易盈。盃盃殘瀝。粘儿餘腥。所希杪忽。過則難勝。苦何求而不足。乃終日而營營。



逐氣尋香。無處不到。頃刻而集。誰相告報。其在物也雖微。其爲害也至要。若乃華樓廣厦珍簾方牀炎風之燠。夏日之長。神昏氣蹙。流汗成漿。委四肢而莫舉。眊兩目其茫洋。惟高枕之一覺冀煩歎之暫忘。念於爾而何負。乃於吾之見殃。尋頭撲面。入袖穿裳。或集眉端。或沿眼眶。目欲瞑而復警。臂已痺而猶攘。於此之時。孔子何由見周公於勞瘁。莊生安得與蝴蝶而飛揚。徒使蒼頭了營。巨扇揮颺。或垂頭而腕脫。或立寐而顛偃。此其爲害一也。又如峻宇高堂。嘉賓上客沽酒市脯鋪筵設席。聊娛一日之餘閑。奈爾衆多之莫敵。或集器皿。或屯几格。或醉醇酎。因之投溺。或投熱羹。遂喪其魂。諒雖死而不悔。亦可戒夫貪得。尤忌赤頭。號爲景迹。一有霑汗人皆不食。奈何引類呼朋。搖頭鼓翼。聚散倏忽。往來絡繹。方其賓主獻酬。衣冠儼飾。使吾揮手頓足改容失色。於此之時。王衍何暇於清談。賈誼堪爲之太息。此其爲害者二也。又如醜醜之品。

醬醢之制。及時月而收藏。謹餅罍之固濟。乃衆力而攻鑽。極百端窺覷。至於大馘肥牲嘉穀美味。蓋藏稍露於罅隙。守者或時而假寐。纔少怠於防嚴。已輒遺其種類。莫不養息蕃滋淋漓敗壞。使親明卒至索爾以無歡。藏獲懷憂。因之而得罪。此其爲害者三也。是皆大者。餘悉難名。嗚呼。止棘之詩垂之六經。於此見詩人之博物比興之爲精。宜乎。以爾刺讒人之亂。誠可嫉而可憎。

蒼蠅、蒼蠅、吾は爾の生たるを嗟く。既に蜂蠶の毒尾無く、又蚊虻の利嘴も無し。幸に人の爲に畏れられず。胡ぞ人の爲に喜ばれざる。爾の形は至眇にして、爾の欲は盈ち易し。孟孟の殘瀝、粘兒の餘腥、希ふ所は杪忽にして、過ぐれば則ち勝へ難し。何を求めて足らざるを苦しむ、乃ち終日營々たるや。氣を逐ひ香を尋ね處として到らざる無く、頃刻にして集まるは、誰か相告報する。其の物に在るや微なりと雖も、其の害を爲すや至要なり。若し乃



ち、華樓廣厦珍簾方牀炎風の熾き、夏日の長き、神昏く氣盛まり流汗漿と成り、四肢を委ねて擧ぐることを莫く、兩目を眯まして其れ茫洋たり。唯だ高枕一覺、冀くは煩歎之暫くも忘れんことを。念へば爾に於ては何ぞ負ける。乃ち吾に於ては之殃せらる。頭を尋ね面を撲ち、袖に入り裳を穿ち、或は眉端に集まり、或は眼眶に沁ふ。目瞑がんと欲して復警め、臂已に痺れて猶攘ぐ。此時に於ては、孔子も何に由つて周公を彷彿たるに見ん。莊生も安んぞ蝴蝶となりて飛揚するを得ん。徒に蒼頭丁髻をして巨扇を揮颺せしむ。或は頭を垂れて腕脱ち、或は立ろに寐ねて顛偃す。此れ其の害を爲すことの一也。又、峻宇高堂嘉賓上客ある時の如き、酒を沾ひ脯を市つて筵を鋪き席を設け、聊か一日の餘閑を娛しまんとすれば、爾が衆多なる之に敵する莫きをいかんせん。或は器皿に集まり、或は几格に屯し、或は醇酎に酔ひ、之に囚つて投溺し

或は熱羹に投じて遂に其の魂を喪ふ。諒に死すと雖も悔いず。亦夫の得ることを食ることを戒めつ可し。尤も赤頭を忌む。號して景迹と爲す。一たび雷汗すること有れば人皆食はず。奈何ぞ類を引き朋を呼び頭を搖かし翼を鼓らし、聚散倏忽し往來絡繹たる。其の賓主獻酬し、衣冠儼飾せるに方つて、吾をして手を揮ひ足を頓て容を改め色を失はしむ。此時に於て、王衍も何ぞ清談に暇あらん。賈誼も之が爲めに太息するに堪へたり。此れ其の害を爲す者の二也。又醜醜の品醬醜の制の如き、時に及び月に收藏し、餅罍の固濟なるを謹む。乃ち衆力を以て攻め鑽り、百端を極めて窺ひ覬ふ。大哉肥性嘉穀美味に至りては、蓋ひ藏すれども稍罅隙より露はる。守れる者或は時に假寐して纔に少しく防嚴に怠る時は已に輒ち其の種類を遺し、養息蕃滋して淋漓敗壞せざる莫く、親朋をして卒に索爾として以て歡び無きに至らしめ、藏獲憂を懐い



て之に因つて罪を得せしむ。此れ其の害を爲すことの三也。是皆大なる者。餘は悉くは名づけ難し。嗚呼、止棘之詩、之を六經に垂れたり。此に於て見る詩人の博物比興の精たることを。宜なるかな。爾を以て讒人の亂を刺ることは。誠に嫉むべくして憎むべし。

流石の歐陽脩も我慢しきれなかつたと見えて、きびく其の罪を列挙して責めつけた。此時より蒼蠅の異名を、歐陽憎 と呼ぶ。すなはち、蠅は其の人を得てより益々有名になつたのである。だから、蠅よりいへば、悪くまれがひがあるわいと喜んで居らうも知れぬ。白河樂翁の

關の秋風 には

蠅てふ蟲は又なにくし。 畫寐の夢妨ぐるは、 忘りをいさむといふべければ、 とがめむやうもなし たゞ書なんと見、 書なんと書くころ、 顔のあたりに、 ひとつふたつとまるを追ひやれば、 しば

しかなたへうつり、 又飛び來り飛び去り、 はては、 友おほく集へて鬪諍し、 あるは、 えもいはれぬふるまひらうせきなり。

雪の日やあれも人の子と、 情の涙の數を惜まぬ定信も、 よくく此奴には愛想をつかした。

埤雅 に曰く

『蠅成市於朝。 蚊成市於暮。』

我が世俗では

『蚤の夜詰に蠅の朝起』

其處へ行くと、 風流三昧の横井也有は

一日假初に、 晝ねのひちを曲げたる漆園の胡蝶にもあらで、 人もすさめぬ身は、 似合しき蠅となりてたはむれしが、 そこにも一顆の玉の上に、 卒然として立とまりたるを、 我ながらおほけなく、 物汚したる心地して夢さめぬ。 蠅や我ならん。 我や蠅ならんと分



別いまだ定まらざる所に……

懊惱たる物おもひ、凝つては夕の何とやら、九六の百に繫がれて、一文  
錢に生爪剥がし、三品五釐に火面を張つて、我利ぢやくと我利合うと  
も、百萬の財石崇の富我が一期、積んだからとて冥途の路用には成らず。  
貧福窮達の理を悟つてこそ、蝸廬も大厦も心安けれ。とはやつぱり重寶  
な口のさき

『蠅こそ憎きものゝ中に入れつべけれ。愛敬なく憎きものは、人々  
しう書きつくべき物のやうにあらねど、萬の物に居、顔などに滯  
れたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは必うとまし。』  
籠をあげて香爐峯の雪と機先を制した清少納言、斯く正直に白狀して居  
る。

露にぬる梢のせみもあるものを  
何をむさぼる心ばへぞも 善水

詩經の中にある

鷄既鳴矣  
朝既盈矣  
匪鷄則鳴  
蒼蠅之聲

之を白髮三千丈綠愁似個長の類と同一筆法と見ればそれまで……さりな  
から

實にうるさい うるさいにも程がある。程を過ごして良いものは無い  
やうだ。焼餅の黒焦げは食ひてがあるまい。味噌のひりつくのも田舎に  
かぎる。旨いもまづいも鹽加減、酸いも甘いも嘗め分けて、右にも左に  
も傾かず、其の真中を行く天稗的世渡りは、他處から見程喜樂なもの  
ではござらぬ。権力を食り過ぎた秦の始皇は寝る暇が無かつた。男子多  
ければ事多し。富多ければ辱かしめ多しだ。左様かと云つて火の車でも



やりきれぬ。無口も多辯も譽められぬ。えせ慷慨はあらずともがな。勇も過ぎては取り材るところが無い。干魃は凶年、霖雨は不作のもと、

眞理は凡て中庸に存す と喝破した、カントもヘルベチアスもなかなか隅にはおけぬ。屈原は平均が保たれなかつたところから、太田蜀山人に一本正面から

死なずともよかる汨羅に身を投げて

變屈原となりけるかな

うへをみな。みのほどをしれ。とは家康の訓言、萬物作つて辭せず。生じて有せず。爲して恃まず。功成りて居らず。夫れ唯居らず。是を以て去らず。とは苦縣の老子が達觀。及ばぬ事の多かりきと、己が心に笠着せたなら、叶はぬ願ひも出まいものを、とかく事無かれと安全を望むは人の情ながら、扱て人生は不如意、世の中は何かにつけて面倒である。蠅も面倒の一つ である。蒲室の芥蠅拂へども去り難しと、禪榻を尋

ねて高風に臥した細川頼之は、面倒を此方から避けたのだ。いや避けるべく餘儀なくされた境遇を、持續するだけの幸福者ではなかつた。避けてしまへば其れ迄である。嬌々たる珍木の頂には金丸の恐れがある。此處を一番、今吾冥々に遊ぶと俗臭を拂ひ除けてしまへば、弋者も遂に断念しやう。張良は流石に黄石公の御弟子だけある。菅公は飛んだ蠅共の呪咀を受けたわい。

彼の鄒魯の學に一生涯をひらいた荻生徂徠、父と共に申し渡された南總謫居の禁解かれて江戸に歸るや、猶未だ志を得ず。種々算段して漸く口を糊して居た頃、隣家の一姫が其の不遇に同情して某塾の繁榮をいふかつた時、徂徠は即ち

『臭いものには蠅が寄りつく』

と獨超然、名利を逐はなかつた意氣は流石に偉いものだ。

臭いものには蠅が寄りつく 蓋し至言、實に振古の斷案、徂徠にして



此言尙ほ一段の趣味あるを思ふ。誠に然り、此世に蠅共の絶滅を見ぬかぎりには、盡未來際破る事は出来ぬ。嗚呼蠅、正義は最後の勝利者なりとは云へ、社會が此蠅共に益毒される事は幾何であらう。咄、蠅、蠅、誠に嫉むべくして憎むべしと歎じたのも無理ではない。

貴賤等を異にす と雖、門を出づれば皆營みあり、獨外物の牽く無く、此幽居の情を遂ぐの隠者の亞流はいざ知らず。苟くも世を憂へ國を思ふ一片の丹心あるの士は、天下の先智先覺を以て自ら任じ、吾にして起たすんば其れ誰ぞやの意氣を以て、此蠅共勦滅の面倒をみなければなるまい。子々孫々の爲に、此面倒を處分してしまはなければなるまい。しかし

天の擗理 は不思議なものだ。晝があれば夜がある。雨降りもあれば干魘もある。酸いものもあれば甘いものもある。善い事もあれば悪い事もある。此厭ふべき蠅が、意外な方面に利用されてゐる事を思へば、

無用の用の眞なるを想ひ浮べる事が出来やう。

『明治三十八年の四月頃、英京倫敦なるベルグエディア街のニウスガイマー商會へ、大きな袋入りの蠅の干物が數多入りこんだ。之はブラジルから輸入されたので、養鶏や養魚の飼料に宛てるのだといふ。同國なるアマゾン河の水面は、しばしば、雲の如く集まる蠅の爲に蓋はれる。されば、其處の土人は、小舟をあやつりつつ網を以て捕獲し、之を干製して外國へ送り出して居たのであつた。』

然るに、二三年前、ブラジルの政府では、斯くの如くどしどし捕獲しては、河中に棲息して居る魚屬の繁殖に影響するといふ理由の下に、遂に全く禁じてしまった。其れが爲一時輸入杜絶の有様になつて居たが、又僅に禁を解かれたので、久しぶりでニウスガイマー商會に顔を見せる事になつた』



而して、之は養鶏養鯉の飼料としては滋養分に富んで居るところから、通常多量の稗、蜀黍等の穀物に、少量を混じて使用するので、需用益々多く、價格も順次騰貴し、一封貳拾壹錢ぐらゐで賣り捌かれたものが、忽ちの間に七十錢臺に上つてしまつた、それにもかゝはらず、同商會へは、佛蘭西、獨逸などから續々注文があるといふ。思へば

利用厚生の途 も種々あるかな。事此處に至れば妙と叫ばざるを得ぬ。さりながら、吾人にとつては五月蠅が先きになつ。彼の正岡子規うたふて曰く。

つかさある人をたとへば厨なる

喰ひ残しの飯の上の蠅

○

憎きものうなじねを刺す蚊はあれど

睡らんとする顔の上の蠅

○

世の中は憎さもこゝに終りけり

炮烙の尻の糞の上の蠅

○

こゝも猶うき世なりけり草鞋編む

田舎の翁の背の上の蠅

俳句にも

罪深く夜を寝ぬ蠅や瓜の皮

几 董

蠅憎し心のさきへたち廻り

曉 臺

目覺けりうつゝに打し顔の蠅

閑 更

侍に蠅を追はせる御馬かな

一 茶

彼も因果な蟲 である。同じ蟲でも如何であらう。蝶の前世に碌な奴の無いにもかゝはらず。其の翅色の美しさや、舞ひの手ぶりのやさしさ



に、遂ほだされて無心の子供まで

てふく てふく

菜の花に とまれ

菜の花に あいたら

さくらに とまれ

さくらの はなの

さかゆる えだに

とまれや あそべ

あそべや とまれ

と、もみぢの様な手を打ちながら、可愛らしい聲で歌はれ、叢生にすだく蟲のいろくは

千草八千草みだれ咲きて

花をしとねの夢おもしろと

おのづからなる蟲の聲ごゑ

チンチロリン チンチロリン

スイツチヨ スイツチヨ

ガシヤガシヤ ガシヤガシヤ

ガシヤガシヤ ガシヤガシヤ

月ある夜半は

秋の野もせの

樂隊おかし

月清らかなの夜 珠玉を欺く冷露の輝きを胸にをさめ、はて無き想ひの

翼身にかりて、マツムシ、スヤムシ、ウマオヒ、コホロギ、クツワムシ

などの自らなる調べをきけば、幽趣身に沁みく

行水の捨て所なし蟲の聲

の詩情は禁じられぬ。是等に比較しては懸隔も亦甚だしいではないか。



同じく生は受けながら、食る事に營々として、尙ほ、自然的需要の奴隷たるを免れぬ彼等を思ふ度毎に、人と生れた吾等の幸福なる事を感謝しなければならぬやうな氣がする。

蠅を打つ音も殿しや關の人

太 祇

蠅を打つ音や隣もきのふから

同

あさましく蠅打つ音や臺所

召 波

我夢も驚かさぬ蠅たゞき

關 更

蠅打つて跡には眺められにけり

千 那

蠅打つていさゝか汚す團扇かな

愚 信

一體人間は、他の同情を受けるばかりでなく、己が感情を他に通じておいて、薩摩の飛脚のそれならで、打ちつけられた護謨毬の如く、反射ある事を望むものである。其は悲しむ時も、喜ぶ時も、愛する時も、憎む時も、尊敬する時も、輕侮する時も、其の他何れの場合に於ても此傾向

を現はして居る。其のくせ他人の幸福は之を妬み、他人の不幸は竊に之を喜ぶ反情的傾向をも具備して居ると云ふ厄介者、自家保存の刺戟が理智の力を押し倒して飛び出す時には、菩薩の額に角が出て、口は耳まで裂けた夜叉の姿と現するのである。しかし、自己が勝者の位置にある事を覺る時は、うら返つて他の不幸に同情をもする奇態の現象を呈する。だから厭世哲學者は、人類の性質には恥づべき數多の點を有して居ると歎息した。

『男子間に在りては、愚鈍を裝ふ者愛せられ、伶俐を裝ふものは嫉まる。女子間に在りては、醜は友を得易くして、美は友を得難し』と云つたのも、亦グラチアンが、

『世人に愛せらるゝには 愚鈍を裝ふの法あるのみ』  
と慨したのも、機微なる這般の消息を窺ふに足るの箴であらう。次ぎの

童話 も亦資となる



或る日、蟻と蠅が道の出逢ひがしらに、何方の生活が立派であるかと云ふ議論がはじまつた。其の時蠅が

『其れは判りきつて居る。其の理由も明白なものだ。凡て神に供へるもので、己が先づ口をつけぬといふものはない。乃公は、宏大美麗な神殿又佛閣などを飛び廻つて、あらゆる御供物をきこし召し、宮中に入つては、自由に帝王の肩にも止まり、頭につけられた佳い香ひを嗅ぎ、之と云ふ苦勞もせずうまい物の食べ飽きをして居る。こんな呑氣な生活が又と世の中に有るもんかい』

と得意になつて大自慢をした。

黙りこくつて拜聴して居た蟻は、此時居すまゐを正して

『そうだねえ。招かれて神様の御饗應にあづかるのなら、其れは

誠に結構だけれど、押しかけて行くお客は、餘り有り難くはありません。あなたは、帝王宮殿貴婦人などと、大層な御自慢ですけれど、私共が、夏の收穫を一生懸命にして居る時に、肴の刺り物や肉の腐つたのを、さもうま相に甜めておるでなさるところを度々拜見しました。いえ實にあなたのおつしやる通り、あなたが夏中遊んでおるでなさるのは誠に結構です。其の代り冬になつてから、寒いやらお腹がすくやらで、まるでよぼよぼ死に相になつて居るではありませんか。其の時私は、ぬくぬくと暖い家に引つ込んで、可愛い子供等とうち揃つて、御馳走の食べ飽きをして居るのです』

又彼の譬喩譚に有名な

露國の文豪ケルイロフに、蠅と蜘蛛と題する次ぎのやうな一話がある。

長閑な春の風快い園に、一羽の蠅が小さな莖に止まつて、ユラユ



ラ風にゆられて居た。そして、花に戯れて居る蜂を見て、さも横柄ぶつた顔をして

『如何も貴公は勉強家だ。一日朝から晩までなまけぬところは感心なものだ。もし乃公が貴公のやうに働いたら、一日で弱り込んでしまふだらう。全く乃公は天に住んで居るやうなものさ。仕事と云つたら、宴會やお客のそばを飛びあるくぐらゐのものさ。それに自慢ぢやあ無いが。市中の大臣や金持は皆知つて居るよ。乃公がどんなに食つたり飲んだりして居るか見せてやりたいね。何處かに婚禮とか命名式とか有ると、屹度第一着に乃公が行くのだ。そして、陶製の立派な皿の上のを食ひ、光つて居る玻璃の器から甘い酒を飲む、お客様より先きにうまい物の擇り取りさ。

そればかりぢや無いせ。斯う見えても、なか／＼か弱い女性は

可愛がつてやるよ。若い美人のそばでは躍つてみせる。そして其の薔薇のやうな頬や、白雪のやうな頸にゆつくりとお休みになるんだ』

『其りや知つて居ます。だが、私は此んな噂を聞きました。あなたを可愛がる者は天下に一人もあるまいつて、宴會などでは、あなたの爲に唯織を寄せるばかりだ相ぢやありませんか。それから何處の内でも、あなたが見えると、直に追ひ出すといふ事までをり／＼耳にして居ます』

『何？ 追ひ出すと!!! 其れが如何したんだい。もし、此方の窓から追ひ出されたら、彼方の窓から飛び込むばかりさ』

如何も是だから

始末にいかぬ いかぬと云つて棄てゝもおけぬ、此奴と狙つたのを、打ち取つた心地は悪く無い。綱に脚を捕へられて驚いた姿は滑稽であ



る。食物には眼が無い。むしろ有り過ぎると云つた方が適當かも知れぬ。何でも御座れ寄り集まつて口づける。そして危険も忘れたやう、何れも同じ事ながら、可愛い口ゆる苦勞する。

伊蘇普物語 に

一匹の蠅が或る夕方、蜜の壺を見つけたので、元より大好物、頻りに端で甜めて居たところが、間に合はぬと思つてか、だん／＼中へ進み込んだので、其の足がひつ附いてしまった、之はとブンブンもがくうちに、たのむ翅までねばり附いてしまった。もう如何する事も出来ない。此時來合せた一羽の蛾が

『はあ馬鹿な蠅だなあ。そんなにしても食へたいのか』

負けぬ氣の蠅も、斯うなつてはグツの音も出ない。其のうちに夕暮はいよ／＼せまつて來た。すると蛾は、燈火の周圍を面白相にグル／＼廻り出した、と思ふ間も無く焼け死んでしまった、蠅は

之を見て

『やあ貴様もやつぱり馬鹿ぢやないか。先きに人の過を責めながら、自分で其のざまはどうしたんだい』

と、吾を忘れて毗匪の恨みを報ゆるところ、是が蠅の蠅たる所であらう氣の毒なのは小慾だ、節を傷るのは小慾の奴に限る。

大慾は無慾に似たりと云ふではないか。其れはそうと旨いものがある。良い匂ひがする。早速響應にあづからうと其處へ集まる。之で充分と舞ひ上ればはて不思議、向うは見えながら出る事が出来ぬ。そんな道理があるものかと押してみるが、びくとも動じない。大盤石の如く構へて居る。向うが折れなければ此方で折れるより仕方がない、グリーンと他の方へ………こつんと頭があたる、やつと思ふ間もなくずり／＼り落ちてしまふ。水の中だ。唯の水では無く頗る辛い。胡椒でも入れたのだから。もがき廻るうちに力が盡きて譯がわからなくなる。蚤をもえ殺さぬ



やさしの姫君でさへ、『まあ澤山ねえ』と嫣然たるものである。蠅から云へば

人間は悪魔の悪魔 大悪魔であらう。しかし、人間から云へば、吾人に蝨毒を興へる以上、現在の有様では如何しても兩立出来ない。食器などから口中に入り込んだ卵が、胃咽喉などで孵化し、爲に嘔吐を催したり、頭痛眩暈等の病を起させたり。昨日口を開けた銚鏝を盞の膳に持ち出してみると、之は又、風はをさまり枝もならさぬ此御代に、中ではしきりに寄せつ返しつ波を打つ。波では無い。蛆が、蠅の世継ぎが蝨き廻るのである。

されば、古風でも不倶戴天と仕度にかゝる。三族を夷して腹恣せにする其の方法は種々あるが、兜鉢に米の白水を六分目程湛え、残り四分のところが、飴又は小量の砂糖を米の粉に混じて練りつけておく

『此處に蠅公溺死す』



第十圖

と宣言あるにもかゝらば、す。甜めたい一ぱいの下司根性から其處に集まる。此時孫臏が強弩を發せしむるの格で、ビシヤリ上から團扇の蓋をすると不意を喰つて白水に陥り  
『遂に豎子をして名をなさしむ』  
と往生する。も一つ農家に見うける方法は  
上のやうに竹でこしらえ、上下の口を残して他の部分



を紙張りにし、細くなつて居る上の口には布袋をくゞり付けておく、之で出来上つたので、蠅の好むものを小さな器に入れて待つて居る、時分を見計らつて、茶碗で物を蓋ふやうに之を上から被せると、蠅は驚いて舞ひ上る。下部をバタ／＼たゞきながら充分舞ひ上らせ、手早く口を起して左右に振ると、否でも應でも布袋に逐ひ込まれてしまふ。残らず袋に逐ひ込んでから、一寸袋の口をひねつておく。さすれば袋中満員になるまでは幾度も使用出来る、尙ほ石油を使つて天上の蠅を落す法が弦齋氏の食道樂にあつたやうだが、餘り實用向とも思はれない。

一羽捕へて檢すれば

**頭部** は球状で、細い頸を以て胸部に連なり、運動は蚤とは違つて自由に出来るやうになつて居る。頭部の先端に備へ附けられた觸角は六個の關節より成立し(勿論肉眼では見分け難い)尙ほ細く凝視すれば第三及び第六の關節は見出し得ぬでもない。第三の節は、内部へ向つて廣がつて

居る無数の小莖を具へて居て、其の下には奇麗な膜を持つ、此關節は單に觸角ばかりでなく、嗅覺や聽覺をも司つて居ると考へられて居る。又第一基部の關節には羽状毛がある。之こそ耳と云ふべきもの

**眼** は殆んど頭の全部を占領して居る二個の複眼と、鼎の足の如くに位置した三個の單眼とで、其複眼中には、モレイ氏の計算によれば三千五百個の單眼を含んで居ると云ふことである。而して此複眼數は、蠅の種類によつて違つて居る。例へば

シミ……………十二個

アリ……………五十個

コガ子ムシ……………八千八百二十個

メンガタスズメ……………一萬二千個

ベツコウトンボ……………一萬二千五百四十四個

と云ふ有様、勿論此一つ一つの眼は、物を見得るにきまつて居る。之を



顯微鏡下におけば、此複雑したものが、良く斯うまで整頓して居るものかなと感心の他は無い。則ち、複眼の面は六角形をした數多の小面に分れて居て、皆等しく二重の凸レンズより成り、其の裏面には、黒い色素で包まれた圓錐形のものがあつて、視神經纖維は其の尖端に集合して居る、單眼と複眼との差違を云へば、單眼は遠距離を見るに適し、複眼は近距離の物體を認識するに好都合である。尙ほ、是を補助するものは觸角にある嗅覺で、目に見えぬ遠方の食物をも之に依つて感知する

戰鬪の準備 眼玉を磨く 蠅

蠅は眼を而して身體を拭ひけり

○

蠅の口ふとはづかしき茶碗かな

口器の構造もなか／＼巧妙なもので、延長した下唇、上唇、下顎鬚より

成り、平常は頭部に潜み込んで居るから自立たぬが、いざ鎌倉となれば、長く惜し氣も無く、見えも體裁もかまはずせり出して、自在なる伸縮に依り、唧筒の原理を應用して、唾液に交へた流動物の食物を胃に輸送する。

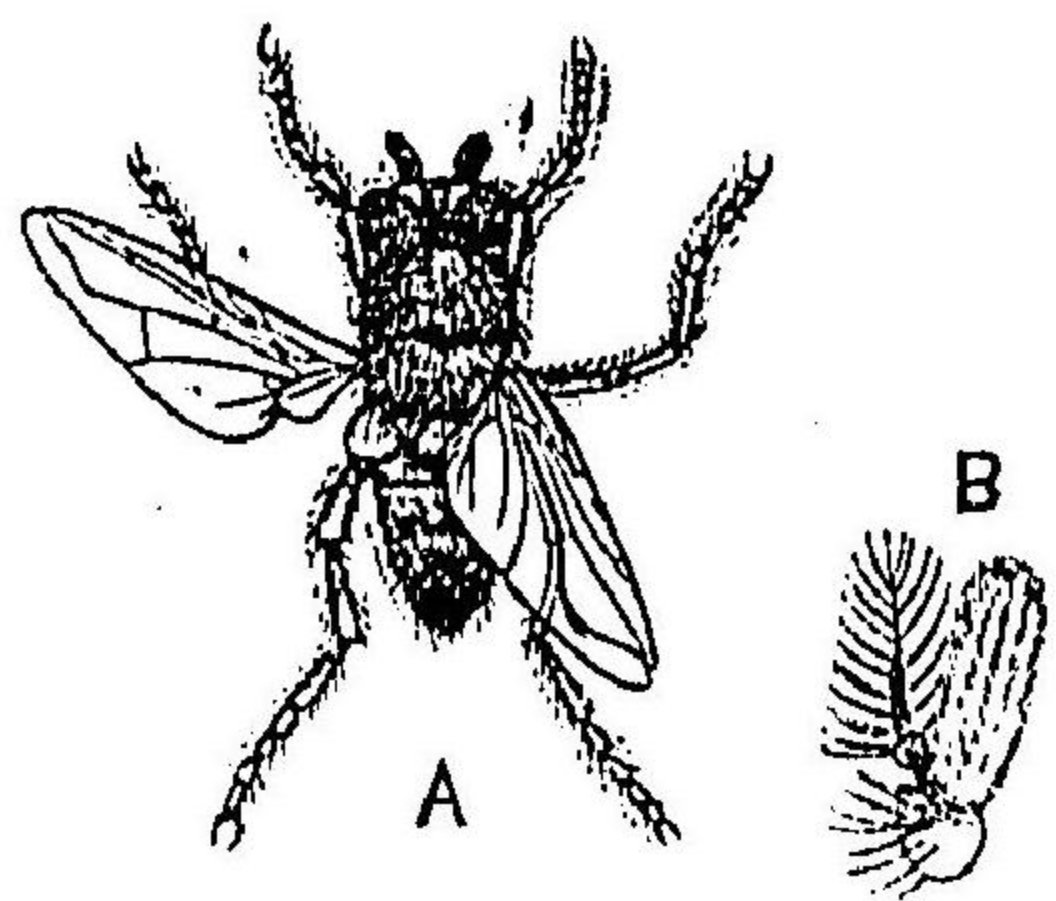
胸部 は三節で前胸は癒着して居る。肢は三對、何れも無粹な粗毛をもち、尙ほ又肢の末端には二個の爪と、其の傍には肉質の吸盤やうのものが二つ有つて、絶えず粘液で濕されて居る故に、平滑なる面に休むとしても、決して滑り落ちる心配はいらぬ、夜間天上などに止つて居られるのも、全く此装置があるからである、翅は一對、後翅は平均棍と變じ、運動の調節といふ役目は承はつて居るけれど、餘りの見すばらしさに、之があつたの翅の變物かと、初對面のをりは不思議に考へる。

發生の時期 は大概春の初めで、産卵せられる場所は、日光の直射せぬ有機物に富んだ塵埃の間、馬糞の空隙などである。



卵は乳白色の楕圓形、日光には頗る弱く、二三時間も曝露されれば生活力を失つてしまふ。産卵せられてから二十四時間以上、遅くも三日以内には透明になつて来る、遂に一端を破つて仔蟲があらはれる。此時は無脚無翅、十三關節より成る體を、伸ばしたり縮めたりして位置を轉じる。もし進路に邪魔物があれば、鉤狀の腮を以て道路を作りつゝ進む。眼は無い。もし有りとなれば、此生活には却つて煩ひとなるばかりであらう。觸角はある。觸角と云うては不當であらう。觸角の代用をする一

第十圖



A 家蠅 對の圓形隆起物があると云ふ方がよい。  
B 同觸角 呼吸器は體を縦走して居る二條の銀色を帯びた管で、關節の尖端に開口して居る。

是より五日以上二週間以内には蛹となる。即ち幼蟲の表皮は、生活力を失ふに従ひ皺縮して、赤色より遂に鈍黒と變じ、蛹莢と云ふ保護器となり、身は其の中に在つて大休止を行ふ間に一變化を來し、凡そ一週間ぐらゐには成蟲となり、爾後二週間のうちには産卵するやうになる。而して

一回の産卵數は百二三十粒にのぼり、年に十數回の産卵を見るが故に、其の始め稀であつた蠅が、夏の盛より秋にかけて驚くべき頭數となる。殊に馬ある地方は非常なもので、先年報知新聞にあらはれた記事をみても

山の手の蠅と乗馬

馬の居る所には蠅、蠅の居る處には馬といふ風に、馬と蠅とは離るべからざる關係になつて居るが、牛込、赤坂、四谷、麻布邊に年一年と蠅の増して來るといふのも、矢張り右の次第からである



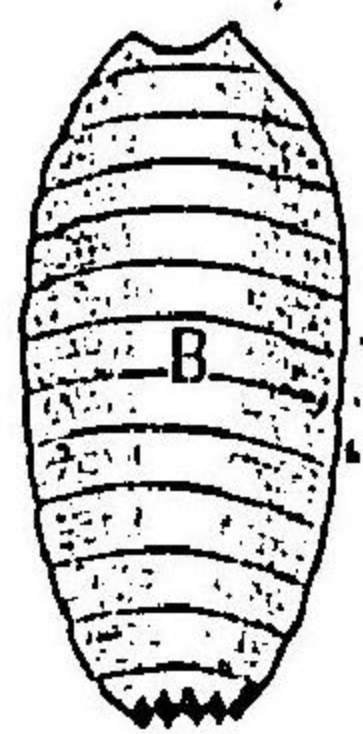
大將中將などになるなど、屋敷も廣いから、二頭三頭の馬が飼はれてあつても、世間に蠅の迷惑をかける程ではないが、吾々同様の並み住りの軍人が、其の狭ま苦しい屋敷の中に、厩を構へて乗馬



A 卵子



B 蛹莢



C 蛹

を置く事は、山の手の蠅の多くなるのと大關係を持つて居るのでつまり、山の手地方の蠅の三四分通りは、是等軍人の乗馬に依つて發生されると云つても、決して過言ではあるまいと思はれる。扱て其の蠅は、どんな害をするかと云へば、たゞ五月蠅のみでなく、或は食物により、或は腫物に觸れるなどして、恐るべき病毒を媒介するものであるから、ならうことなら、一匹も居ないやうに退治したい位であるが、其れには、既に發生したのを採るといふよりも、發生

第二十圖

しない豫防法を實行するのが大切である。して見ると、例の軍人の乗馬は、銘々の狭い屋敷内に飼つて置くことは衛生上忽諸に看過すべき小問題でなからうと思はれるから、市内なり市外なりの何れかへ、三四個の乗馬合飼所を作り、馬丁をして、朝牽き出し晩に牽き入らしめるやうにさせたなら、軍人本人に取つて、格別な不自由もなくして、公衆衛生に向つて、一大利益を興へる譯になるから、これは棄て置かずに調査して貰ひたいものであると。某理學博士は物語られた。

馬の多い滿洲に蠅の多いのも是である。日露戦役當時、負傷兵の綱帯に、何時の隙にか産卵すると見えて、をりく思ひもかけぬ蛆が這ひ出しては軍醫を困らせたものだ。やはり卅七八年の話で、或る日のこと、隊長が、兵士一人で蠅二合を捕へた者には、セリーと云つて一壺壹圓拾五錢もする酒を褒美にやらうと云ひ渡した。兵士は丁度戦争の無いをり



の事だから

是は面白い と種々考案をめぐらしながら捕獲にかゝつた。かゝつてみると案外世話がない。二時間経つか経たぬうちにはや二合ぐらゐになる。早速差し出して褒美を頂戴する。七十五人の兵士が、吾も吾もと腕をふるつたので、二日目には捕獲高合計六斗ばかり、せしめたセリイは三百本、一同は手を拍つて

大捷の祝盃 を舉げた。ところが勸進本元の方には、餘すところ僅に拾壹本となつてしまつたので、係り員は大に氣をもんで、之では逆もやりきれないと隊長に上申すると

よし／＼方法があるわい 其の翌日より獨立獨行他人に依らず、一人で二合を捕へなければ褒美はやらぬと規則の改正をした。しかし、之だけでは實否が解らぬから、軍曹や曹長に監査役を命じておいた。中に其んな事とは知らずに、二三人同盟して捕へたのを差し出した者があつた。

しかし、前にちやんと報告が来て居るので

命令違反の罰 として其の蠅は没收、おまけに尙ほ二合の蠅を捕へさせられた。ところが此時分は、もう非常に狩りたてた後の事であるから、一人で二合は容易の仕事では無かつた。斯ういふ風に、毎日／＼暇にまかせてやつたので、遂に柴河堡の陣地には、蠅が殆んど居らなくなつた相である。

さて、其の蠅と云つても随分範圍が廣い。随つて生活状態も種々雑多である。先きに記したのは、イヘバへに就いてゐる。其の

昆蟲學上の位置 を述べれば

雙翅目 DIPTERA 中

短角亞目 BRACHYCEPHA の

家蠅科 MUSCIDAE

に屬するので、此科に入るものは、觸角の第三節は側扁、其の上方に一



個の長い刺、もしくは羽状刺をもつて居る。口吻は能く發達して居て肉状、之には二個の剛毛がある。背上一には一横溝を現はし、腹部の關節は四節或は七節よりなつて居る。

其の仲間 としては

イヘバへ *Musca domestica* L.

ヒメイヘバへ *Homalomyia canicularis* L.

オホイヘバへ *Cyrtoneura stabulans* Fall.

クロイヘバへ *Musca corvina* F.

クロバへ *Calliphora lata* Coq.

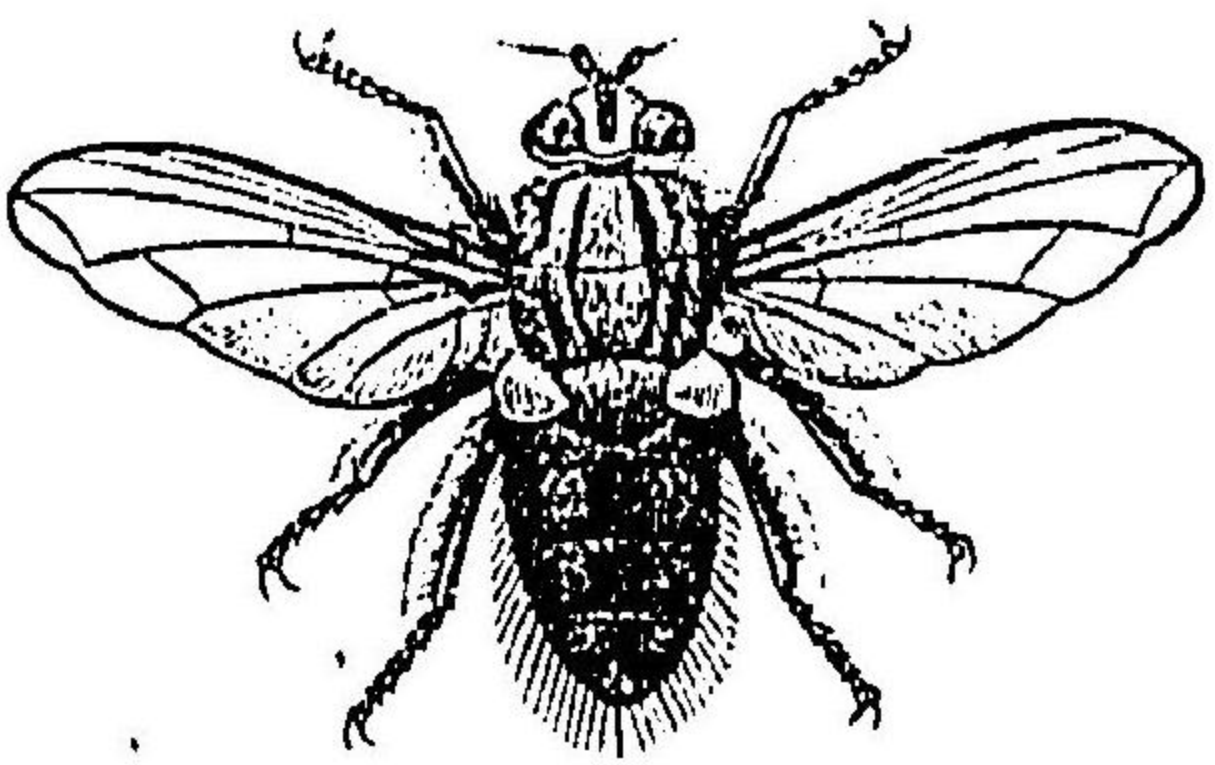
コクロバへ *Calliphora erythrocephala* Meig.

ヒメクロバへ *Ophyra nigra* Wied.

キバチクロバへ *Mesembrina Latreillei* Fesv.

キンバへ *Lucilia caesar* L.

第三十圖 (昆)



カヨノツシバへ

オホキンバへ *Lucilia jedona* Big.

ヨビキンバへ *Lucilia dux* Esch.

シヤウジヤウバへ *Drosophila obscura* Fall.

ムキモダリバへ *Chlorops extraneus* Wied.

ダイコンバへ *Anthomyia (phorbia) Brassicae* Bouch.

ナガクロハナバへ *Phasia annalis* F.

クチナガハナバへ *Prosona siberita* L.

セマダラハナバへ *Graphomyia maculata* Scop.

サシバへ(コウミンバへ) *Stomoxys calcitrans* L.

ヒメシマバへ *Sarcophaga melanura* Meig.

ロシマバへ *Sarcophaga privigna* Rond.

シマバへ *Sarcophaga carnaria* L.

ヤドリバへ *Tachina larvarum* F.



ニクバへ *Sarcophaga carinata* L.

カヒコノウジバへ *Crossocoma Sericariae* Rond.

是等は何れも單性生殖はせぬ。雌雄交尾の後に種族の繁殖は計らるゝのである。随つて雌雄の體形は自ら異なつて居る。其の區別の要點を云へば、雄は雌より身體が小さい。其の代り複眼が大きい。腹部の末端を見るに、雌は錐のやうに細くなつて居るけれど、雄のは切斷せられたかの如く見える。然るに、昔は奇妙な事を云ひ傳へて居た。蠅は灰から出る 之である。伊藤道基の詩に

憎蠅

|       |       |
|-------|-------|
| 本従灰裏出 | 貪濁信宜哉 |
| 知氣猡爲去 | 覘虛潛復來 |
| 咬人蚊最是 | 害物爾尤魁 |
| 我輩雖仁弱 | 殺渠獨不哀 |

本灰裏より出づ

貪濁信に宜なるかな

氣を知つて猡つて去ると爲し

虚を覘ひて潜に復來る

人を咬むの蚊は最も是にして

物を害するは爾尤も魁なり

我輩仁弱なりと雖

渠を殺すは獨り哀ます

之で見れば、灰の中から生れて來るやうであるが、事實左様な事は決してない。元來詩文は感動を興へるもの、科學は智識を授くるものとしてしまへば、如何なる誤りも感情に訴へて、其れを動かせば善いやうなものゝ、みすゝ解つた誤謬は改めねばなるまい。

謝鑒制 曰く



蠅最癡頑。無毒牙利嘴。而其擾人尤甚。至于無處可避。且變芳馨爲臭腐。澆淨素爲緇穢。驅而復來。死而復生。比之讒人。不亦宜乎。物之最。小。而可憎者。蠅與鼠耳。蠅以癡鼠以黠。其害物則鼠過於蠅。其擾人則蠅過於鼠。世間若無此二種。晝夜差々得帖席矣。『蠅は最も癡頑なり。毒牙利嘴無きも、しかれども其の人を擾すと尤も甚し。處として避く可き無きに至る。且つ芳馨を變じて臭腐と爲し、淨素を澆して緇穢と爲す。驅るも亦來り、死するとも復生く。之を讒人に比するも亦宜ならずや。物の最も小にして憎むべき者は、蠅と鼠とのみ、蠅は癡を以てし鼠は黠を以てす。其の物を害するは則ち鼠は蠅に過ぎ、其の人を擾すは則ち蠅は鼠に過ぐ。世間若し此二種無ければ、晝夜差々席に帖く事を得ん』

さりながら

山も見えず鳥もかけらず五百日ゆく

八重の汐路の船の中の蠅

竹の里人

といふやうな場合もある。左様かと云つて。日本記の

『推古天皇の三十五年五月。蠅集まつて虚に浮ぶ十丈、鳴音雷の如し。』

や、齊明天皇の六年の怪では、話に聴くさへ慄然とする。とかく人間ほど我が儘なものはない。あれは害蟲、之は益蟲と云ふのも吾人が、

自衛の上から勝手に呼ぶ名稱で、黃禍と云ひ白禍と稱するのも歸するところに二つは無からう。嗚呼、適者生存優勝劣敗の世の中、弱い者に生れたら最後、自己保存の一念存する限りは、片時の安心も得る時なく、二六時中薄氷を踏む思ひで命を繋がなければならぬ。昔より云ふ。

『長いものには巻かれる』

のだ、麒麟も老いては鷓鴣に劣り、鸞鳳も窮すれば蟻蝶に苦しめられるだらう、文明國と云ふ



立派な看板 は掲げて、巾着切りもあれば火事場ドロズムもある。其れでも此方が弱ければ、裁判をしてくれる者が無い。下手に事をあら立てれば盗人に追銭。血で血を洗うて身を亡ぼす。曾てこんな話を聞いた、蠅が、せつかくうまい物にありついたらと思へば、直ぐに蠅打ちが追つかけて来る、如何してやらうと種々勘考の末、蜂のところへ劍を借用に出かけた。ところが、馴れぬ者には危険だと云つて承諾してくれぬ。此方は仇討したさ一ぱいに頻に歎願すると、蜂も氣の毒になつたと見え、其れほど思ふなら貸してもあげやう。しかし、一度刺したら直に鞘に收めなければいけないとくれぐれも注意した。蠅は大得意、天にも上る心地で雀躍りしつゝ、其の劍を腰に落しこみ、食物を見つけて其れを甜めながら、來れ遅しと待ち構へて居た。蠅打ちは斯かる備へのあるべしとは、夢にも知らう筈が無い。又しても死太い奴、今度こそは逃しはせぬぞと近よつて來た。いつもなら急いで逃げ出すべき

蠅が、如何してか今日は悠然として居る。は、あ此奴食物に眼が眩んで居るな。よしと獨り心にうなづきつゝ次第に迫るやいなや。ブンと云ひさま蠅から飛びかゝつて、昔日の鬱憤想ひ知れと刺し徹した。刺したら直にの注意があつたから。急いで鞘に收めやうとして、誤つて自腹に突き徹してしまつた。蠅打ちは無神経なだけに平氣なもの、態あ見ろと引き上げたといふ。

實に巧妙な比喩 では無いが。嗚呼弱肉強食、か、ればこそ社會主義の鼓吹者も現はれたのである。天上に浮べる雲一團、彼は如何に變化するであらう。聞くならく。渤海灣頭の風波、時に異様の響きを起すとよ。世界統一の天業を負へる我が

大日本帝國 みよ。蜻蛉は古より、蚊蠅を勦滅すべき大使命を享受して居るではないか……とは云へ

ま、ならぬ此世 である。儘にならぬ所も面白からう。儘になるやう



で成らぬ所も妙ではないか

夕立や智慧さまざまの被りもの

人は己がむきく思ひの儘に走つて居る。譯の分らぬところに人生の意義がある。神祕の帳をあげぬうちが花だらう。一步地平線上より、徐ろに世相を大觀したら如何あらう。儘に成らぬと歎息する者、勝手にしろと放抛する者、成るく信じて居る者、ならせて見せやうとあせる者、成るか成らぬかときよろくして居る者、無頓着の者、成つたら如何しやうと取越し苦勞をして居る者、是は面白いと手を拍つて眺めて居る者、するくつと開いた人間世界の繪巻物は、先づ大略こんなものであらう。すなはち此中には、動物らしい天稟の美質を發揮して、蠅共の御多分を出でない賢人も珍らしくは無い。之こそ皮想文明の餘徳として、世界人道の爲、我が帝國の爲

血涙を濺いで祝盃をあげる事を惜みはせぬ。

THE FLY. William Blake

Little Fly,

Thy summer's play

My thoughtless hand

Has brushed away.

And not I

A fly like thee?

Or are not thou.

A man like me?

For I dance,

And drink, and sing,

Till some blind hand

Shall brush my wing.

If thought is idle

人生と昆蟲 第二蠅



人生と昆虫 第二編

一三四

And strenght and breath,

And the want

Of thought is death,

Then am I

A happy fly,

If I live,

Or if I die.

蠅

ウキリアム ブレーキ

小さな蠅

汝が夏の遊びに

吾が心なの手もとを

かすめては飛びさりつ。

吾は蠅に似たらずや

はた

汝は人に似たらずや。

吾は踊りつ 飲みつ はた唄ひつゝ

そは何ものか盲の手が

吾が命の翼うばふまで。

もしも思想が生命力の息にして

思想なきが死ならば

吾は即ち蠅なるべし

よし生くるとも

はた死ぬるとも。

人生と昆虫 第二編

一三五



眠れる者よ、早く醒めよ。立て志士。沈類修靡せる社會が眼に入らぬ筈は有るまい。熱烈なる宗教家よ。眞摯なる教育家よ。禍の神に對する供物は、是等沈類せる修靡せる者には求める事は出来ぬ。

蒼蠅之飛不過十步。自託騏驥之髮。乃騰千里之路。(後漢書張敞傳)  
『蒼蠅の飛ぶは十歩に過ぎず。自ら騏驥の髮に託すれば、乃ち千里之路に騰る。』

又曰く。

『信力よわきものには、他力をあたへてこれをすくふ。たふれふしたる赤子を親のいだが如し。念諸つよき願諾にすがりて、みづからすゝむ。驥につく蠅の千里にかけが如し。』(光行)

とも云ふ。宗旨の闘闘が能事ではあるまい。教義の講釋が目的ではあるまい。智識の注入が主意ではあるまい。外觀の整頓が理想ではあるまい。首陽に骸を採る時世ではあるまい。馬又は斑驢が孤立して其の群を離れ

ない限りは、狼にしる熊にしる、はた又虎獅子でも、之を己が食餌とする事は出来ぬ。志士とし云へばとかく己を潔くして、他を忘るゝの弊がある昔も今も

秋こよひむかふる駒の尾につきて

蠅もひかるゝ大内の庭

(萬佗枝)

徳は孤ならず。必ず隣あるを思はゞ、火を投げて直に燃えよと望む短氣をゆるめて、細くも長い希望の綱が欲しい。

淨瑠璃窟物語 に

『衣服改め、刀引提げ出で迎へ、我等式の賤しき娘御眼に留り、御憐愍、正眞の氏なくして玉の輿、剌へ大分の賜物、親迄かゝる身になる事、千里の馬の尾に留まれば、蠅も千里を行くが如し。冥加至極と一禮す。』

とあるが、何時の代からのならはしか、騏驥と蠅とは能く引合に出され



て居る。

驥の歩み二萬句の蠅あふぎ是

其角

などでも思ひ合されやう。彼の莊子にある鵬は、垂天之雲の如き翼を持ちながら、南冥へ徙るに水撃三千里、扶搖に搏つて上る九萬里去るに六月息を以てすと云ふ。してみれば、蠅が騏驥の髮に托し、駒の尾に寄るぐらゐは何でもない。然るに、中には、自分で風船を製作して、五十里百里の遠方へ譯も無く旅行する種屬がある相だ。フランスの

ナチエール博士の話によれば、扱ていよ／＼旅立をしやうとなると、滑かな木の葉に止まり込み、頻りに口から泡のやうなものを吐き出して、是をだん／＼葉の先端に集め、小梅ほどある泡の塊に作りあげてしまふ。乃ち風船は出来上つたので、是が葉を離れ、ば、風のまに／＼飄々と搖られながら進む。蠅はしつかり止まつて居ればよい。

時には又、大きな河邊や海邊で、三十四十の蠅が協同一致して大なるも

のを作り、風の向きを考へて此風船を飛ばす事もあるといふ。本能とは云ひながら、其の必要に應じての大膽なる此所作は、一步踏み出す海をこわがる人間などより、遙かに偉いと云つてもよからう。余は思ふ。

彼等は偉い 動物として現はれた以上は、規約の如き自然の或る束縛を脱する事は出来ないけれど、吾等に比べて、未來を疑ふと云ふやうな取越し苦勞をせぬだけ、廣い天地に逍遙するの自由を有して居るだけは偉い。バドソン氏は曰ふ

『彼の小動物を注視せよ。此處には自然が與へたる美味を貪り、相争ふことなく互に信じて疑はず。恐れず。自ら働きて満足し、自己を信じて明日を憂へざるは、普通動物の性質中賞美すべき點なり。』

と、嗚呼、自ら働きて満足するの生活、眞の幸福とは之である、自然には規約の如き或る束縛はあるけれど、偏頗なき親切と寛大なる供給とは



凡ての動物に注がれつゝある。然るを、時に輕薄なる偏頗なる理智に捉へられ、確實なる現在を妄却して、定かならざる影の追慕に又無き實在を犠牲にする者あるは、實に顛倒の甚だしきものではないか。セチカが

『人は其日其日を尊重せよ』

と云つたのは、過去に悔なかれ。未來に杞憂なかれと同じ意である。詩を作るより田を作れとは、偏頗なる理智に捉へられて居る不具なる人に授ける教へである。働かざれば食を得ずも亦然り、之を無上の處世訓と心得て居る者は、生が即ち苦痛であらう。斯かる人士には

俳句 の如く簡勁にして即興的なるものをも、味ふべき權利を分與されて居らぬ

顔につく飯粒蠅に與へけり

嵐雪

蠅追ふに妹忘れめや瓜作り

其角

隣から何くはんとて來る蠅ぞ

旨原

信濃路や蠅に吸はるゝ瘦法師

許六

雪信が蠅打ち拂ふ硯かな

蕪村

蠅多き市に隠るゝ晝寝かな

太祇

羽もいだ蠅歩きけり誰が所爲

同

苦しさを笹葉蔭行く牛の蠅

水節

此の蠅によくく蘆生ねぼう哉

大江丸

摺子木に蠅を打ちけりとろゝ汁

儿董

雨の蠅疊の上をありきけり

超波

つがもない國へ渡りぬ船の蠅

杜支

蠅打つて聊かけがす團扇かな

愚信

蠅打ちをのがるゝ蠅の命かな

洞李

伽羅たけば又もの好きの蠅が來る

花讚

石竹の蠅は四町の馬やかな

沾徳







に新らしいのを少し抜き出してみれば

蠅多き店の夕日や生節

愛想は蠅打ちて蟻に興へけり

酒臭き車夫のひるねや蠅の中

真黒に蠅のたかりし砂糖かな

蠅を追ふ晝伺蚊を打つ夕餉哉

白書院こゝでも蠅が居る事か

むにやくと眠り入るなり顔に蠅

同じ蠅でも秋と云へば

秋の蠅女房が髪の亂れかな

初七日うし二七日淋し秋の蠅

牛賣つて淋しくなりぬ秋の蠅

天上に吊る焼沙魚や秋の蠅

鳴雪

子規

同

孤雁

秋竹

紅葉

紅緑

紅

子規

同

四明

一轉

檜笠秋の蠅見る柱かな  
ものゝ香に酔入るさまや秋の蠅  
灯笼や四つの尾に居る秋の蠅  
糸とりも残る一人や秋の蠅  
秋の蠅淋しき人を尋ねとぶ  
干網にかげる日脚や秋の蠅  
橋守の錢に遊ぶや秋の蠅  
殊に面白いと感じたのは

馬の尻にふき飛ばされな秋の蠅

同じく幽寂なしんみりとした味は、其の可笑味の中に籠つて居る。之が冬となれば

飯櫃を包む毛布や冬の蠅

子守女の寐くれたれ髪に冬の蠅

露月

青嵐

田士英

櫻碗子

村雨

孤軒

飛雲

三四女

未央

句佛



冬の蠅夢みる如くさまよひぬ

四方太

鱒の骨 蛙の頭や冬の蠅

一 轉

木柵に角する牛やふゆの蠅

呼 潮

破壁やしどろ這ひ行く冬の蠅

二 六

まるで趣きが違つてしまふ。元來之には、マツムシ、スラムシのやうに音色の美があるではなし。形態美、色彩美は勿論なし。唯僅に配合の調和によつて、漸く美的感想を起さしめるに過ぎない。随つて俳人は、之を美化する爲に種々の苦心を重ねて居るが、總じて夏の蠅はうるさいもの、秋の蠅は衰への寂しみを配合するもの、冬の蠅はいよゝゝ衰への哀れな有様と、臘氣ながら或るタイプに這入りかゝつて居る。之では進歩の見込みがない。後人がもし此域を脱する事が出来ないとすれば

古人の糟粕 を甜めて居らねばならぬ。然らばと云つて、同じ材料を二度も三度も使へば、陳腐になるとか、剽竊だとか斷じた譯では決して

無い。同じ材料でも使用の如何によつて、勁健ともなれば、優柔ともなり、壯大ともなれば、繊細にも、婉麗にも、樸雅にも、平易にも、複雑にも、輕快にも、莊重にも、奇警にも、平凡にも、眞面目にも、突飛にも、其他何々千態萬狀、寫實にしる、理想にしる、一度經過する想化の節如何によつて差違が生ずる。試みに並べてみれば

つがもない國へ渡りぬ船の蠅

杜 支

笠の蠅もう今日からは江戸者ぞ

一 茶

濱出で、今日亞米利加の市の蠅

氷 桃

船の蠅橋立まつしまいつくしま

同

之に比較しては、韻の平仄の古事の來歴のと、唯さへ堅苦しい漢字の使用にあたつて、興へられて居る自由までも放抛して小さい型に入り込んだ漢詩人の詩は

恰も綿を噛む やうな氣がするであらう。云ふ迄も無く、詩の内容即



ち實質は、美的感想であればよい。外包即ち形式は、此美的感想に調和して助けるものであれば充分ではないか。左に三四有名なものを摘出して、餘は讀者の判断に任せやう

○ 幾日亂朱紫

王漁洋

商廳欣掃除

孫郎彈不易

戎子賦何如

瑟瑟涼秋至

營營計已疎

何來遺集此

往事笑中書

○ 眇形纒脫囊中胎

皺翅搖頭可惡哉

苦不自量何種類

玉階金殿也飛來 郭登

○ 水結東溪凍未漪

風陵枯木怒猶威

不知春力來多少

便有青蠅負暖飛 盧道愜





村北村南打稻忙  
浮雲吹盡見朝陽  
不宜便作晴明看  
撲面飛蠅未退藏

陸游



第 參 蚊 MOSQUITO

蚊はかむ也 人の肌をかむ蟲なり、むを略せしなり。是は貝原益軒の推斷である。其の昆蟲學上の位置を云へば

雙翅目 DIPTERA 中

長角亞目 NEMATOCERA 中

蚊科 CULICIDAE

に屬し

ウスカ *Culex pallens* Coq.

アカガ *Culex pipiens* L.

シロカ *Culex subulatus* Coq.

ヤブカ *Culex divisi*, Schm.

などが普通で、或る學者の云ふことに、未だ世人に紹介せられないもの



が二百種以上はあらうと、南亞米利加に於ては、五十に近い数が記された相であるが、日本に於ては、未だ充分な調査が出来て居ない。

我が内地産の蚊の中で、刺螫部に炎傷を起す事の甚だしいものは、豹脚蚊、と銘を打たれた剛のもので、脚には派手な縞の股引を穿いて居る。殊に忌むべきは

ハマダラカ *Anopheles sinensis* Wied.

にして、恐ろしいマラリヤ病毒の媒介者なる事が発見せられた。また彼の有名なる

西米の役 キューバ島に於て、米兵の多く斃された黄熱病も、此媒介によると云ふ事が明瞭となつた。尙ほ本邦の各地に發する瘧と云ふ病も、彼の瘳猛な喙によつて傳播せられる。何瘳猛だつてかまふものかマラリアは熱帯に近い土地のものだからと、たかをくくつて居るわけにはいかぬ。何時如何様な機會で移殖するかは豫測する事が出来ぬ。

飛翔力に就いては 確定した距離を聞かない。オスボルン氏は凡そ一哩を限界として居られるが、クリストファ氏は四百ヤードより六百ヤードと測定し、ユング氏は、遙か下つて二百ヤード以内と云つて居られる。今かりに一哩とした所で強い飛翔力とは云ひ難い。それでも數千里に到る事がある。布哇の如きは、以前蚊の影も見えなかつたのに、今日ホル、府の如きは、蚊帳なくては到底安眠し難い有様となつた。是は全く千里の馬の蠅に於けるが如く、米國と船舶が交通する間に、何時かは知らず輸入されたのである。されば、交通機關の完成に従つて益々其の傳播の機會は多くなる。討滅の方法が、より多く實行されない限りは、年々歳々其の數を増すばかりである

The sheep-bell tolleth curfew-time;

The gnats, a busy rout,



Fleck the worm air; dismal owl,

Shouteth a sleepy shout;

The voiceless bat, more felt than seen,

Is flitting round about.

○

入相告ぐる鐘の聲

木の間をぬひて聞ゆれば

遊ぶ羊のいまはとて

歸るか鈴のひやくなり

亂れて飛べる蚊の群は

空をまだらに彩りつ

眠たげになく鼻の

聲もさびしき夕まぐれ

耳にしるけん音たてゝ

聲なき蝙蝠とびかける

○

蚊柱のいしづるとなる捨兒かな

言 水

嗟乎、百鬼は夜行、血にあきた蚊もあれば、愛に飢えた人の子もある。

晝のうちには大概姿も見せず。灯ともし頃から、か細い悲痛の音をしばつ

て呐喊、されば、ふらりとさがる夏の夜の月に、粒々辛苦の玉の汗を拭

ひ、梁伯鸞が荷持瘤、陸龜蒙が鍬だこをさすり、梁父の吟の鼻唄もよけ

れど

夕顔棚の下涼み は實に物騒である。

蠅てふ蟲は又なにくし。(申略)又蚊てふ蟲もにくさは劣るべから

ず。夏の夕涼しきに端居して、笛のしやうかなんといへば、早其

聲をしるべに飛び來り、己が名呼ぶ聲いとうるさし、蚊やりふす



ふれど、煙り薄きほどばなほ立ちさらず。人もたえかぬる頃、かれもしばし立ち行き侍るを、其隙を得て帳打ち垂れつゝ、今宵は安きいぬへかめるとおもふうち、耳のあたりに弊して、枕のあたりさりぬるいとにくし。しそくもて焼き殺してんとおもへど、起きあがるほどのわびしければ、人のひ出でゝやき盡くせよしそく持ちありくほかげの目にてりそひて、ねぶさいとたえがたし。顔に留まりてさすをはやうちにうてば、とぶともみえず。腹ふくるゝばかりすはせて打てば、血打ち散りてけがらはし。只手と足の裏さしたらんは、かゆさもそこさすべうもなく、ひたがきにかきてもあたらす。いとくるし。ひるの程も、調度ならべ置くかたはらよりしのびやかに出でゝ害ふのみ。足に白き斑ありて、こと國にもとらをもて名づけし類なるべし。(關の秋風)

頃 天明七年 白河樂翁老中となり、大に文武の二道を奨励し、同八

年に至つては、人材登用の儀を達せられたので、風雲の志有るものは云はずもあれ、上下擧つて文武々々とうなつたところから、世を擡ね者の蜀山人

世の中にかほどのさきものは無し

ぶんぶというて夜るもねられず

と鳴いたばかりに、幕府は、其の時勢を誹譏したものに違ひないと、大きな眼玉で睨みつけた、幸にして御手討ちは免れたけれど、聲色を真似てさへ此有様、時世が時世なら無理な壓迫も受けねばならぬ。之は別として、正直正銘の蚊に於ては、實に豫想以外の仕事をする。

今より七十餘年の昔 露西亞では、馬參拾頭、牛七十匹、尙ほ又羊が四百餘、合せて五百有餘の家畜が蚊の襲撃を受けて、逃るゝに術なく狂ひに狂つて無慘の最後を遂げたと云ふ。

デーリー、クロニクル に



「倫敦は蚊群の襲ふ所となつた。彼等は如何にしてか海外より來り最初船渠に現はれたのが、いつの間にか傳播して、今は到るところで見得るやうになつた。殊にテムス河流域の低濕地、及びモスクウエルヒルの附近に多い。不思議な事は、東洋の蚊よりも其の毒が多いのか、或は、英吉利の住民は、日本支那等に寓する西洋人よりも其の毒に感じ易い爲か、之に刺されたところの男女子供は如何しても醫者の治療を受けなければならぬ。一醫士は一週間に四十人を治療したといふ。其の瘡口は非常なる結果を生じる。即ち、小孔が相繼いであらはれ、其の局部は膨脹して硬くなり、往々關節に腐敗し易い疹が出来る、又眩暈を起したり、憂鬱の狀態に陥る者もある。ひとり倫敦ばかりで無く、ポーツマウス港の水源地附近に於ても、其の害甚だしく、殆んど黒死病と同一視せられ居り、安眠をする唯一手段として、其の巢窟に撲滅法を施行

するやうになつた。」

彼地に在つては、其の鋒の鋭さを黒死病と同一視して居るのだ。遙に洋を隔てた英吉利の事として

對岸の火事 祝しても居られまい。氣長に構へても居られまい。いくら偉い日本民族だからとて、まさしく生血を吸はせて、黙りこくつて居る雅量はあるまい。

蚊の喰つたまでを恨みの數に入れられ無くても、此方からは入れたくなる。

起きて見つ、寢て見つまでと便なく、蚊帳の廣さに只ひとり、蚊をやく火より胸の火の、燃ゆる思を察しやんせ。

は、女の愚痴としても

蚊遣火やいたみ入つたる馳走ぶり

に至つては同感であらう。今でも、田舎にまゐると随分此御挨拶にあづ



かる。而して之は、古くより行はれたものらしい。萬葉集に作者は未詳ながら

足日本の山田守る翁が置く蚊火の

したこがれのみ吾は戀居らく

續いて古今集の讀人しらすが

夏ならば宿にふすぶる蚊遣火の

いつまで吾身下もえにせん

尙ほ後撰集の讀人しらすで

上にも底にも思ひこがれし

など、其の他を少し擧げてみれば

夏來れば室の八島の里人も

尙かやり火や思ひ立つらん

小侍從

いと、尙そともの梢茂合ひて

宗良親王

煙に暮るゝ里のかやり火

夏の夜の月見ることやなかるらん

西行

蚊遣火たつる賤が伏屋は

かやり火の煙にむせぶみどり子が

蘆庵

聲もいぶせきやどの夕ぐれ

ふきいるゝ軒の煙のいぶせさに

宣長

風もやつるゝしづがかやり火



きえなばとはるゝを待ちしかやり火の 宣長

煙ながらに月ぞあけゆく

○

夕ざればかやり火たかぬ宿もなし 眞淵

この里人は月や見ざらん

○

をり／＼にかやりの煙たきつけて 春海

賤も心を月によすらん

あけゆけどまたも打たく蚊遣火に 春海

なほよをのこす賤がさゝぶき

○

いをやすくねん爲こそはおく蚊火の 景樹

煙に夜たゞ打むせびつゝ

立上る夕の蚊火の煙にぞ

千 蔭

有と知らるゝ木隠の里

何れも同じ夏の夕暮 このもかのもとに賤が家の、有と知らるゝ蚊遣火が、下もえせぬ里は無かつたとか、なか／＼盛に煤ぶらしたものと見え。其の煙出しに用ゐられた材料は、多くは蓬で、其の他に杉葉、檜葉、椿葉の陰干、蜜柑の皮、胡桃、子ズミサシ、煙草など種々様々ある。昔て友を訪ねて寝物語をした時の事、蚊帳が無いので、庭先の松葉を採集し、之をいぶらして漸く凌ぎをつけた事があつた。所によつては米糠を燻す宿がある。其の理由が有り難い。曰く。

『蚊の嘴が曲つてしまふ』

口吻が曲つてしまつては豫定の行動がとり悪くからう。豫定の行動をとり悪くゝするのが此方の目的であるけれど、左様うまく問屋で卸さない。



も少し奮發して、除蟲菊の粉末を投げ込めば申し分は無いが、一般にと  
しては未だ算盤がもてぬ。

臺灣では土人が、細長い蚊燻を賣りに来る。しかし、分析の結果を  
みると、之には無水亜硫酸を含んで居る。之では、蚊よりも本蚊様の方  
が危険と云はねばならぬ。此他國々によつて用ゐる材料は異なるにして  
も、蚊燻の法は通じて行はれた。

支那の二十四孝中には、自分を蚊に喰はせて老母を守つた男がある。  
喰はせる男も男なら、知らぬ顔の親も親だ。第一孝經に

『身體髮膚。受之父母。不敢毀傷。孝之始也。』

とあるでは無いか。昔壁の中よりもとめ出でたりけん文の道をば、此男  
は露ばかりも知らざりけりな……とざれたくなる。流石中華と誇る國  
だけに、よく此んな話がある。墜水の上に鯉が躍り上つたり、群雀が飛  
び込むあたりは餘程神秘的だ。此神秘的にインスピレーションを乗じて

筆の命毛を震はせたのが

水滸傳 であらう。此著者は怪力亂神を語らざる孔子の御弟子ならざ  
る事は云ふまでも無い。彼の西廂記中張君瑞が其の不遇を歎する言に、  
才高ければ俗人の機に入り難く、時に乖いて男兒の願ひを遂げずとある  
が、さればと云つて、パンに汲々たる蚊士輩が、人間の弱點に乗する挑  
發的作物には感服出來ぬ。是等に比べては、荒唐でも無稽でも非人情で  
も、花和尚や九紋龍、豹子頭や李逵の跳ね廻るところに力瘤がは入る。  
力瘤と云へば

征露の役 我が勇猛なる軍人は、當の敵よりも、夜襲して來る蚊軍に  
苦しめられたものだ。其の節面帳を用ゐて漸く凌ぎをつけたのであるが、  
之は蚊帳からの思ひ付きであらう。而して、其の蚊帳てふものは何時頃  
から使はれたものかと探つてみると

嬉遊笑覽 に



『太神宮儀式帳、延喜式などに見えたれど、むかしは下さまの用ゐざりしなるべし。春日験記に、白き蚊帳をかけたるが見えたり。もと、蚊やは、今の如くなる物にあらず。竹棹を四角にたて、それにさげるなり。故に、蚊帳の耳は布毎に付たるなり。吉日をえらびてつりそめ、又吉日に收む。晝の間は不用なれば、片端の竹を一方によせて、帳を一處にあつめて、紺をとりて、片端の竹に打かけ置なり。』

とある。今日吾等が使ふ蚊帳とは、作り方使用法の違ふ事がわかる。其れが何時の間にか、現今用ゐられる品の如く變化したので、用途が一般に廣まつたのは元和以後の事であらう。

『ねふたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりきて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身のほどにあるこそいとにくけれ。』  
とは清少納言のかこち言、蚊帳の出来たのは自然の要求である。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の比、端居珍らしき夕始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ、力なく残りたるは淋しき方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊やり焼く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、彼の七賢の夜咄には、如何に團扇のひまなかりけん。(也有)

かやを出て又障子あり夏の月 丈草

いくら閑人だからとて、時間つぶしに蚊帳を釣つて見る酔興者もあるまい。釣手を握つた下女が、網でも打つ格で疊むスタイルは、川柳子の看願を忝うするにしても、一般からは厄介視せられて居る。他に名案があれば、水の低につくが如く、其れに趨くに極つて居る。近來は何會々々と、朝のむつくら起きから晩のころりと寝る迄、指折り敷へてもつくされぬ時勢だもの、如何せやるなら、一つ

蚊屬討滅の宣言書 を高く掲げて、廣く天下に呼號し、單に現代に貢



獻するばかりで無く、子孫をして此餘澤を被らしめるやうな救世會を組織するがよからう。いつもながら

先鞭は歐米人につけられて居る。即ち米國紐育には、既に蚊屬驅除協會といふのが設立されて居て、之が絶滅の方法は講究せられつゝある。嘗て其の第三總會の席上で、會長ウキリアム、ジー、マセソン氏は、開會の辭中、米國の人口が年々減少するに就いては、蚊に關係するところが最大である。かるが故に當協會が、各家専門の學者、并に一般の賛成を仰いで、協同一致、以て蚊族を撲滅する事が出来たならば、我が北米の爲、實に大なる幸福であると述べ、蚊に關する種々の報告をしまうた後、前に出した宣言書に就いて討議決定したと云ふ。左に其の宣言書中の蚊屬研究に資するところを三四擧げ出せば

- (一) 合衆國に棲息する蚊の種類は、百種以上ある。
- (二) 蚊の孵化するには、三週間はかゝる。

(三) 或る種類の蚊族は、一回三四百の卵を産する。

(四) 蚊の飛翔力は數百ヤードである

と云ふので、餘程まで研究の歩を進めて居る。蚊軍討滅の作戰計畫は、彼等が習性經過を明にして、其の虚に乗するの機を知つた後でなければ勝利の豫測も信用出来ない。蘇秦が瞑目せざりし間、合従の策がまんまと繩渡り出来たのは、蘇秦が張儀の習性經過を呑み込んで居たからである。藤吉郎が足を洗つて太閤になつたのは、掌心の逆理中指を貫いて居たからでは無い。其の時代人物の經過習性を胸にたゞみ込んで居たからである。苟も生存競争の場に、晴れの的を落さうとする者は、此處に隙をすゑて狙を定めるがよい。それは其れとして

彼の習性 に就いて述べやうなら

ふけゆけばたつ蚊の聲もしづまりて 永 宣

軒もる月に松風ぞふく



ちりならでよるくはらふ蚊の聲も 爲村

あつく寝られぬ床の手枕

杜鵑まつ夜ふけゆくたかむしろ 諸平

蚊の細聲の名のりのみして

夏の夜は枕をわたる蚊のこゑの 後京極

わづかにだにもいこそねられぬ

横の戸の明るを夏の待詫ぬ 通躬

枕によるの蚊をいとふとて

山の井を蚊の鳴き出る夕哉 三秋

齒染深く釣瓶おろせば鳴蚊哉 不詳

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し 蕪村

晝の蚊をうしろへかくす佛哉 一茶

南無阿彌陀佛の方より鳴蚊哉 同

釣鐘の中よりわんと鳴く蚊哉 同

小庇や盥ひとられて蚊の迷ひ 道彦

出るにも夕暮、同じ喰ひつくにも、暗い方暗い方へと廻つて居る。光明正大に白晝を濶歩するといふ意氣は到底見られない。と思へば、獅子奮迅の勢で、燈火に飛びついて生命を落すしれ者もある。捕へて蟲眼鏡の下に置けば、ても勇ましの武者振りや。頭部に長く突き出した二本の觸角は、先端少しく太く、十の關節より成り、細毛美しく密生し、夜光の珠とも見える金屬性光澤強き複眼は二個、口吻は軟くして人を螫すとも